

出藍文庫

5-1

東方随筆合同「移り香」

近藤貴弥 編

3 目次

目次

飲酒のすゝめ	五
蠹魚閑話	十五
手記	三七
探し物	五三
春、三月	五九
青	七五
食堂九千尺	八一
昼下がり	九三
朝の街角にて	一一五
彼女の事	一二三
朝夕三昧	一二七
視線	一五一
余暇の価値	一五七

飛ぶ首と飛ばす首	一七一
L a F l a m e d , O r	一八五
秋雨	一九一
後書き	二〇六

飲酒のすゝめ

酒という存在は、とても面倒な存在だ。

作り方からして、それを証明できる。順に挙げていけば、第一に、穀物を育てなければならぬ。田畑を耕し、種を撒き、育て、その実を直接食べる量よりも多く得ることから始まる。第二に、ここからは良く知る米の場合に限るが、磨かねばならない。質を良くしようとするほど、その磨きによって捨てる部分は多くなる。第三に、麴を用意することだ。ここからは神頼みな部分が多くなってくる。いや、最初から神頼みか。収穫期に大きな嵐がやって来たら、それこそ酒造りどころの話ではなくなる。首尾よく麴を用意できたならば、これを磨いて炊いた米にまぶしてもろみにしてから第四の段階だ。醸造樽へ水ともろみを入れ、これをよく混ぜる。適切に熱を管理し、神さまが調子に乗りすぎて醸しすぎないように注意しつつ、この大きな樽を全体によくかき混ぜることも必要となる。そして暫くの間が必要とされる。この間に、ただの水は酒へと醸されるわけだ。最後に、絞って粕を除く。こうしてようやくありつけるようになる。我らが燃料——純米酒^{レギュラー}の完成というわけだ。

文章にしてみればたったこれだけのことだが、ここまで一年がかりだ。じれったく、面倒な作業というのを解ってほしい。それをどいつもこいつもあつという間に呑み干してく

れる。時には醸す側の身にもなつてもらいたいと、宴会となると思うことがある。そう思ったときは必ず、隣で無限に酒を生み出すことができる瓢箪を片手にふらふらしている鬼を眺めることにしている。この鬼が持つ瓢箪は、一年もかけなければ得ることができない酒を、たった数瞬で生み出してしまふ力がある。なんとも贅沢な品だ。しかし、実に味気ない。あの、醸造樽から汲み上げて袋に詰め、重しを掛けて絞る時の咽るほどの香りや、その刹那に溢れて来る、火を入れていないどころか瓶にすら入っていない酒が持つ例えよりのない煌き、そしてどんなに良いと薦められた酒よりも絶対的に甘い、唇への当たり方と舌をほぐしていくような味。それがない。瓢箪から生み出された酒には、それがないのだ。だから、私は満足する。あの汲みたて絞りたてにありつけるのは、一年という時間が必要であり、その残滓があるからこそ、宴会のたびに、こうして寄つてたかつて呑み尽されてしまうのだと。それは醸す側の者にとって、誉なのだろう。純粹に、うれしいことなのだろう。そう思いが入れ替わることで、私は次の杯に手を出すことができる。作るにしろ呑むにしろ、途方もなく面倒な話ではないか。

ところで最近、焼酎という奴にも手を出すようになった。その、瓢箪を持っている鬼が教えてくれるというので、挑戦してみたのだ。

ここでは、実は味にもうるさいその鬼が大喜びしたという結果だけで良いだろう。製法は普通の酒とほとんど変わらない。最後に蒸留という、酒を一旦煮立たせ、余計なものを火の神に取り除いてもらう工程があった。この釜は河童が作ってくれた。これ自家製の蒸留酒ハイオウも手に入るようになったということだ。ただ結局は、神頼み。それを商売とする私だけでも、結果を得るまでは一抹の不安がよぎる。特に、その頼む相手が「どうしたというんだ」とひょっこり顔を出しに来たりすると余計にだ。

この焼酎はさつま芋を材料にした。米は、やはりいつもの酒としたかったのがあって、そこからできる麴を焼酎用も含めて多めに作ったのみだ。本当は黒麴らしいが、そちらと別に作るのは面倒事が余計増えるので避けた。ただ芋と言っても、普通に八百屋から買ったのでは足りる量ではなかったし、焼酎の味そのものを左右すると鬼に脅かされたので、品を選ぶこととした。(これも面倒なことのひとつだ。) そうなれば、専門家に頼るが吉とばかりに、私は豊穰神を訪問し、彼女が選んだ芋でもって焼酎を作ろうとしたのだ。これがその不安を呼び込む原因となってしまった。

その日、私は芋と麴と水を、鬼が新しく作った醸造樽へと仕込み、上手く醸してくれるように祝詞をあげていた。それが終わったときのことだ。いつものような、何か遠くで同

意の意志が示されるといった、とても感覚的なのは、形容するなら泡だけを水から掬いあげる時のあやふやな感覚ではなかった。はつきりと、「よっしゃわかった！」と、物凄く近くで、それこそ目と鼻の先で力強く拳を握る声が聞こえたのだ。

私は慌てて周囲を見回してしまった。醸造樽の並ぶ倉は、いつものように自分と鬼の姿しかなかった。ただ、鬼も驚いたような顔をしていたので訊いてみると、同じく力強い応答が私の方から聞こえてきたと言うのだ。間違いなく、豊穰神だったとも付け加えられて、私はすぐに樽の温度計を確認したり、まだ泡も立っていない樽の中を覗いたりした。そしてその日は一晩中、樽に付き添うこととなってしまった。

最終的には、そうして上手に出来上がったから良かったものの、気を揉むことになるような返答はしないでくれと、この芋焼酎を届けに行ったときに本人へと直接ぶつけることとなった。幻想郷ならではのかもしれないが、やはり一言はつけたくなるものだ。すると彼女は、巫女の焼酎などという稀有な酒のためだったから、いくらでも力を貸すと返答をくれた。受け取った柄樽の栓を早速開けて、香りを確かめながらだ。そのあまりに期待していたとおりだという笑顔には、こちらも毒気を抜かれてしまった。あんな笑顔を見せられてしまつては、来年もまた焼酎を作らざるを得ないではないか。こういうところも、酒は面

倒な物だと言える点かもしれない。

また別な形の面倒もある。

霧の湖の畔に住む吸血鬼も、酒を醸す場所を持っている。彼女の場合は葡萄酒だ。幻想郷で手に入る葡萄酒では量が足りないし、だいたい味が気に入らないと言って、スキマ妖怪に無理を通し、毎年郷の外から買い付けているそうだ。それならば、外に居た頃に吞んでいた葡萄酒を買いえばいいだろうと言ったことがあるが、それは駄目なのだそうだ。魔に属する存在であるために、聖に属する存在へ奉るために醸された葡萄酒では、彼女にとつて毒になってしまいうらしい。だのに、儀式に必要なとかで、毎年自前で醸造する必要があるそうだ。こちらも本来同じような事情で酒を造っているので、ここは文句をつけるべきところではなかった。しかし、そうした事情が付随してきてしまうのも、酒というものだ。本当に面倒なことが魚の鱗のごとくにつきまとう。

ただ、相伴に預かったあの葡萄酒はとても美味しかった。この時に聞いた話。吸血鬼の妹が曰く、高値で取引されるものもっと渋みが強く、いわゆる通好みの味になるそうである。しかも新酒は安酒に属するという。本邦では新酒が出来次第に、さっそく呑み尽してやろうという形が多数派であるから、洋の東西での考え方の違いに接するに至った気持ちだっ

た。

ところがだ。感心して帰路についてから思い出したことがあった。神社の倉に、長年留め置いている樽が幾つかある。二十数年前に醸された酒で、ずっと管理を続けているが、果たして呑めるものだろうかと不安になり、ひとつ開いてみることにした。開くと言っても、一斗樽。呑みきれれるものではないので、一旦引き返し、その吸血鬼姉妹とメイドを呼び、図書館で弾幕をぶちまけていた魔法使い三人を数珠つなぎにして、神社の酒倉へ向かった。道中でその話をする、メイドが色めきたったのをよく覚えていた。新酒が喜ばれる文化のために、そうした古酒はなかなか手に入らない貴重品だそう。私にはよくわからないことだったが、どうやら流通させるとかなりの値になるらしい。

ごろ寝していた鬼も引っ張り出し、彼女に倉からその樽を本殿前まで持って来てもらう。これまで無事にこの酒を守ってくれたことを感謝する祝詞をあげてから、樽の横腹に吸血鬼の館から借りて来た注ぎ口を捻りこむ。これはなかなか便利な品で、いちいち樽の蓋を割らずに済むというものだ。そこから一杯目を碗に出してみる。木の色が移ったのだろうか。麦酒のような黄金色どころか、その蒸留酒のような茶色の酒が碗に落ちていく。途端に、新酒を絞った時にだけ嗅ぐことのできるあの香りが周囲を包み込んだ。私はまさかと

思いながら、それに口を付けてみた。あの独特なとろみのある舌触りと、棘など一切感じることのない甘みとうまみが脳髓を走り抜けるではないか。喉越し軽く、その際には檜の良い香りが鼻から抜けていく。正直に驚いた。粕と酒を分けた瞬間の、最も美味しいと舌が覚えていたそれが、完全に残されていた。もちろん、そんな酒を連れて来た吞兵衛たちが見過ごすはずもなく、あつと言う間に樽の中身はそれぞれの胃袋へ処分されてしまった。

この出来事以来、倉には毎年、一斗樽が一つずつ増えている。それぞれに醸造した年を記した木札を括りつけ、綺麗に管理をしている。別に作っている梅酒と同じように、季節によって樽を置く位置を変え、時には氷を巻くこともある。非常に面倒な作業だ。全く何でこんなことをしているのかと、自分でやりだしたくせにと、苦笑いがこみあげてくる。それでも、妖怪の山の上にある神社の連中がやって来た年の樽を、この間そちらへと分けた。この時の連中の喜びようは、こちらも何故だか嬉しくなってしまう程だった。一緒に空にしたその樽の酒は、とても美味かった。

梅酒と先述したが、こちらも面倒事の塊だ。焼酎か八入折りの酒を用いるのが、果実酒の製法としては一般的だ。しかし、この神社にある梅酒は、普通に作ってもどうしても出来てしまう、酒精の濃い部分を用いている。この部分は見極めて汲み出さないとならない。

普通の酒よりも余程に濃いから、一緒にしてはいけけないのだ。そして、この部分だけ特別に絞るところから梅を漬ける準備は始まると言えば、その面倒さは通じるだろうか。絞った酒は樽に密閉して、しばらくの時を倉で過ごす。青梅が出回るまで、一回休みというわけだ。

青梅が出回る頃になると、神社にスキマ妖怪が現れる。郷の外から仕入れて来た角砂糖をたっぷり抱えてやって来るのだ。氷砂糖ではなく、角砂糖。これは私からの注文だ。昔は氷砂糖だった。それを角砂糖に変えたのは、一回このスキマが言うに、上手く手に入らなかったとかで、その代用品として角砂糖を持つて来たことがある。それで梅を酒に漬けてみたところ、存外に上手く出来たので、それから角砂糖を使っている。その直方体を一つずつ、丁寧に、煮沸消毒した瓶底へ、数段分に敷き詰める。手間な作業で、手がべたべたになるが、きっちり詰めて込んでおかないと、上手く梅は漬かってくれない。砂糖を石畳のように詰め込んでから、焼酎で洗った青梅をごろごろと瓶に放り込んで、休んでいた酒を注ぎ入れる。

これだけで吞めればいいのだが、知られる通り、またも時間を置かねばならない。砂糖が溶け切り、餡色となるまでは、静かに倉の片隅で眠らせるしかない。

そうして出来上がった梅酒を、翌年の梅花の頃に頂くわけだが、何も梅園で吞まずともと思う。冥界の亡霊姫が従者と連れ立ってやって来て、賽銭箱の前で「なほにほいけるかな」とかやりだすと、もう面倒でたまらない。さつさと裏庭の紅白梅が見える所まで入って来いという話だ。梅酒は時を置けば置く程に味わい深くなるとは言つても、酒には変わらない。黙つて吞めばいいということだ。角砂糖を使う私の梅酒は、それだけの味は保証するのだから。

倉の扉の前に立つて、中を見渡しながら延々と述べてきたが、まとめとするならば、酒というものは面倒しかないということだ。作るにしろ、保管するにしろ、吞むにしろ、面倒ばかりなのだ。それでも、一連のことをやっている自分は、やはり面倒くさい人間だということなのだろう。ならば、また今夜も吞み明かすこととしようと思う。そういう面倒くさい物があるから、面倒なことが起き、それに巻き込まれるのだから。《了》

とぎよかんわ
蠹魚閑話

(抄)

サー・ジェラルド・シヤスター『大英帝国紅茶案内 一八八八年度版』

小悪魔が紅茶を淹れる必要はまったくない。

小悪魔とは蔵書の管理や修復保全など図書館業務の補助のために召喚した使い魔だ。真名は契約にかかわるので伏せる。あくまで図書館業務が役割であり彼女に給仕を頼んだ覚えはない。それはメイドの仕事だ。しかしどういうわけかわたしの紅茶を淹れたいと言う。目と声とばたばたという翼で決意を伝えてきたのでやむなく許可した。出てきた茶は香りがなく色も薄く口をつけるまでもない出来だった。味もメイドが淹れたものとは比較にならない。飲み干してから微細にわたって評価を伝えると彼女は悄然としていた。

予想に反して小悪魔は次の日も紅茶を持ってきた。

昨日の失敗に鑑みてがんばったと言うものの一日で技量が飛躍的に向上するわけはなかった。わたしは『韓非子』から侵官の害は寒きより甚だしというところを読んでやってあなたが紅茶を淹れる必要はないのだと説いて聞かせた。

その翌日はおとなしく本を読んでいたのでさすがにあきらめたのだろうと思ったがそう

ではなかった。小悪魔が読んでいた本は『大英帝国紅茶案内 一八八八年度版』だった。これで紅茶の淹れかたを研究しているのだと言う。わたしはその本をそのときまで見たことがなかった。どこにあったか訊くと図書館の蔵書だと言う。わたしが存在を知らない本が図書館にあったとは疑わしい。ただ小悪魔に嘘をつく理由もなさそうだった。

どうしてそこまでしてわたしに茶を飲ませたいのかと聞くと小悪魔は沈黙し赤面してうつむいた。覗き込むと眼をそらした。後ろ暗いことでもあるのにちがいない。

やがて蚊の鳴くような声で「パチュリー様に喜んでもらえることはなんでもしたいのです」と言った。パチュリーとはわたしの名だ。小悪魔の紅茶では目下わたしは喜んではいないと伝えるとがんばりますと返答にならない言葉をよこしてきた。

押し問答の気配を感じたのかメイド長の咲夜が時間と空間の連続性を無視して忽然とあらわれた。咲夜は人間である。おそらく幻想郷でもっとも人間離れた人間だ。本名も年齢も出身地もわからない。咲夜にくらべれば紅白巫女も山の上の巫女もまだ常人に近いとわたしは思う。

「どうなさいましたか」と咲夜が訊くのでちよūdいと思いい小悪魔を指差して茶の淹れかたを教えてあげなさいと言いつけた。

「かしこまりましたわ」咲夜はおじぎをした。いつ見ても彼女は不自然なほどに瀟洒な存在だ。

「いえわたしは自力でやりたいのです」と言う小悪魔が手にしている本を見て咲夜はあらなつかしいと独りごとを言った。

この本は咲夜のものだということだった。ずいぶん昔に知り合いからもらったのだと言う。

「証拠にほらここに血がついています」たしかに裏表紙に大きな血痕がある。しかし咲夜もこの館に来るずいぶん前に紛失しており図書館にある理由は知らないと言う。

けつきよく小悪魔が手ほどきを拒絶したので瀟洒におじぎをして咲夜はその場から消えた。

血痕のいわれは聞かなかった。

『大英帝国紅茶案内 一八八八年度版』は八つの章からなるが茶の淹れかたは第六章にある。これ以上おもしろくない紅茶を出されても困るのでその日は小悪魔といっしょにその本の内容を検討することにした。

印刷も装丁も上等なものではなく百年を経てまだ原形が残っていること自体が不思議な

代物だった。停滞の魔法をかけなければ読む端から崩れていってもおかしくない。

咲夜はいったいどこでこのような本を手に入れたのか。いつ。どこで。

一八八八年の大英帝国といえど誰でも連想するだろう事件がある。史上もつとも有名なホワイトチャペルの連続殺人である。犯人は百年以上たってもわかっていない。本名も年齢も性別も不明だ。まるで事件の直後いきなり時間と空間の連続性を無視して消えたかのように忽然と消息を絶った。

そんな事件があった年に出版された本だ。

咲夜はいったいどこでこのような本を手に入れたのか。

咲夜という人間はいったい何者なのか。

気になった者は自分で勝手に調べるといい。わたしは本を読むのにいそがしい。

咲夜の過去がどうであれ『大英帝国紅茶案内 一八八八年度版』は小悪魔の技量を向上させるのにたいして役に立たなかったのはたしかだった。彼女の技量を向上させたのは数限りないトライアンドエラーであり来る日も来る日も飲み続けたわたしの忍耐力のたまものだ。

ある日ようやく小言を言わずにすむレベルの茶を出してきた小悪魔にこれまでの苦勞を

酒^{とうとう}酒^{とうとう}と語って聞かせるとなぜだか彼女はうれしそうに笑った。主の不幸を笑うとは何事かと叱ると「でもパチュリー様はわたしの紅茶を今まで残らず全て飲み干してくださいます」などと言った。それは単にもつたないからであり叱ったのに幸せそうな顔をされてはたまったものではない。

やはり小悪魔が紅茶を淹れる必要はまったくないのだ。
べつに淹れてはいけないと言うつもりもないけれど。

※

ムハンマド・イブン・アル・タウイージー『またたかぬ悪魔の灯火』

読んだことない。読みたい。

※

ドラツヒエンブルクのゲルトロード『主に捧ぐ赤き竜の大きいなる秘儀と秘術』

里へおつかいに出していた門番が戻ってきた。なんとかいう貸本屋から本を借りてきたのだ。人間ごときに本を借りねばならないのは業腹だが紅魔館の大図書館とて無限の蔵書を誇るわけではないので仕方がない。

「このところわたしは幻想郷の龍神について研究を進めており資料を集めていた。『ただいま戻りました！ これでいいんですよね？』」

門番が差し出した本が『主に捧ぐ赤き竜の大きいなる秘儀と秘術』だ。十六世紀の魔女が書いた魔術書である。詳しい内容は知らないがドラゴンに関する記述が多いということは聞いていた。

門番は汗をかいて息を弾ませていた。もしかしたら里から走りづめで帰ってきたのかもしれない。飛ばばいいものを。体を動かすことを苦にしない娘だ。わたしとは違う。

ところでわたしはそのとき研究が行きづまっておりたいそう機嫌が悪かったので返事もせずに本を受け取った。受け取るというより奪い取るようにした。門番を見るときは見るというより睨みつけるといふ具合だった。わたしの剣呑な視線を受けても彼女はのほほん

と笑っていた。それがまた癪に障った。なにか言つてやろうと口を開きかけたわたしの目が彼女の帽子に向けられる。

その瞬間わたしは啓示を受けた。

龍は十二支でいえば辰チネンに相当する。辰という字には星の意味もある。さらに三辰といえは太陽と月と星のことなので畢竟ひっきやう辰は運行する天体を指す字なのである。

また『聖書』ヨハネの黙示録によればサタンは竜でもある。そしてサタンはルシファーと同一視される。ルシファーは「光り輝くもの」明けの明星を意味する。竜リウサタンルシファー＝明星。ここでも竜が天体であるということが示唆されているのだ。

つまり龍神とは運行する天体であり天体を運行させている世界の法則そのものということになるのではないだろうか。

そう考えれば魑魅魍魎も神も悪魔もひしめくこの幻想郷で龍神があまねく信仰されている意味も通じる。たとえばレミイが運命を操ろうとスキマ妖怪が境界を動かそうとそれは世界の法則に許された範囲で細工しているにすぎず釈迦の手の上の斉天大聖だ。

それこそが龍神という世界律。

門番の帽子についている龍の字の書かれた星。それがわたしに仮説を思いつかせる啓示

となつた。

我に返ると門番は不思議そうな顔でわたしを見ていた。いらついていたと思つたら急に動きが止まって考え込みはじめたのだからいぶかしく思うのも当然だ。

「どうしましたパチュリー様」

「あなたの帽子は趣味が悪いわね」

「ひどいなあ」という台詞ほど気分を害したようすもなく門番は苦笑して頭をかいた。

「趣味の悪い帽子のおかげではかどる研究もあるということよ」

「えっと意味がわかりません」

物を考えていなそうな顔で門番はあははと笑つた。これは悪口ではない。物を考えないというのはひとつの才能だ。考えている者は行動を起こさない。物を考えない者は推進力を持つ。わたしが『主に捧ぐ赤き竜の大いなる秘儀と秘術』のことを口にしたとたんにさまざまな場所に調べに走り貸し本屋で見つけて借りてきてくれたのはすべてこの娘だ。

そして偶然であれなんであれ考えない者は考える者にインスピレーションをもたらす。わたしが行きつづまったタイミングで龍と星の帽子を頭に戴いた彼女が登場したのは偶然だが行動を起こさない者には偶然すらない。

わたしは彼女に篤く礼を言ってお礼に面白かった本を貸してあげようとしたところ理解できないのですみませんといわれた。理解できない本を理解できたときこそが快感なのだが門番はそうは思わないようだった。物を考えないからだろう。これは褒め言葉ではない。

ちなみに『主に捧ぐ赤き竜の大なる秘儀と秘術』は偽書であり内容もくだらなかつたのですぐ返しに行かせた。

※

J・S・テオバルデス 『万斛ばんこくの麦』

この本の中に「読み終わって本を閉じると一つの世界が終わった気がする。現実世界が終わるときもこのようであるに違いない」という文を見つけた。

これは現実世界など本と似たようなものであるというシニカルな言葉ではない。逆だ。一冊の本を深く読めば現実の世界と同じだけの広がりがあるのだという意味だ。

本は現実世界に等しい。読書家の傲語ごうごである。

幻想郷が終わるときは果たしてどうなるだろうか。

わたしは満足して幻想郷を読み終えることができるだろうか。

※

ニルス・カールセン『フクロウとじのつばさ』

フクロウはいつもよるにおきます。だからじぶんのつばさがどんないろなのかしりません。

真っ黒に塗りつぶされた中に大きな目が二つ光っている絵とともに絵本『フクロウとじのつばさ』はそうはじまる。

その後フクロウはその翼が日の光のもとではきれいな虹色をしているというコウモリの言葉を真に受けて朝を待つ。そして太陽がのぼった途端にまぶしさで目が潰れてしまう。ラストページはもはや目が光っていない真っ黒に塗りつぶされただけの夜の絵だ。

ようするに余計なことを知ろうとするなという教訓を与えようとしているのだろう。甘言を信用するなという教訓も。人間の子供には正しい教育だ。

これはわたしの本ではない。

わたしの友人レミリア・スカレットがその妹フランドールのために買ったものだ。フランドールはここ五百年弱のあいだ教育の機会がいささか少なかったらしいが最近になってレミイは妹に対する情操教育の必要性に目覚めたらしい。

数ある絵本の中からこの作品を選んだのは熟読吟味の結果ではなくて虹の翼というのがフランドールを連想させるからという短絡的もとい直観的な選択だという。

フランの能力から本を守るため防御魔法をかけてほしいとのレミイからの依頼。彼女に物を与えるときはいつもやっていることだ。ぬいぐるみしかり家具しかり。今回は絵本というわけだ。

フランの能力とはありとあらゆるものを破壊するというものだ。誇大な形容だとは思いますが強力なことにまちがいはなくわたしの魔法では彼女の破壊に真っ向から抵抗することはできない。だが正面から当たってもだめなら搦め手から行くのが智慧ある者のやりかただ。物体の「目」を見極めてそれを自分の手の内に移動させ「きゅっ」とすることにより破

壊するのがフランの力だ。そこでわたしは「目」を見えづらくすることにより破壊能力の行使を制限する方法をとった。耐久力を上げる魔法ではなく幻術の範疇の魔法となる。

それとてすっかり冷静に見極められれば隠し通せるレベルではないが感情のままに手当たりしだい壊すのを防げる程度の効力はある。

逆に言えばその程度の効力しか生むことができないのだ。

魔女の矜持にかけていつかはフランの能力を上回る防御魔法を開発しなければなるまい。ちやうどフランが図書館に来たので絵本を渡した。姉からの贈り物だと言うと受け取らないだろうからわたしからということにしておいてほしいとレミイには言われている。フランはその場で読みはじめ何度か繰りかえし読んだ。本を閉じたので感想を聞いてみた。「フクロウは幸せだと思う」と意外な答えが返ってきた。理由を訊くと「だって羽はほんとうは虹色じゃないんでしょう？ 目が潰れたおかげで事実には幻滅しなくてよかったね」と言う。

「たとえ嘘でも闇の中で希望を持ったままではいられないのは幸せだよ」とフランは淡々としていた。

嫌な事実を直視する必要はなく嘘の希望にすがれば闇の中でも生きていける。五百年近

くの幽閉生活で得た思索の結実がこれであろうか。

フランは自分とフクロウを重ねているように見えた。

だがフランはひとつの視点を見落としている。フクロウの翼がほんとうに虹色だったらという可能性だ。

もしほんとうに虹色だったとしたらフクロウは真実を嘘の希望だと思い込んでいることになる。それは不幸ということにならないか。

レミイが妹に向ける愛情は虹色の翼である。それが嘘の希望でないとフランが気づくのはいつの日になるだろう。

『フクロウとにじのつばさ』は翌日破壊された。

※

ふたたびムハンマド・イブン・アル・タウイージー『またたかぬ悪魔の灯火』

だから読みたいのよ。

※

竹居南翠 『すみだがわゆめのうたかた墨水夢幻泡影』

博麗神社の宴会に行くことになったのでこの本を持っていった。

宴席では煩わしさを厭いとつて隅へ行き読書をはじめた。この本が酒席の猥雑さからわたしを守る結界の役割を果たす。

本一冊を隔てて見る百鬼夜行の饗宴は夢の如く幻に似ている。酒精アルコールの煙霧がすべてを模糊とした薄闇の中にはおかし込んでいる。楽団の演奏も遠い。鬼の高笑いも山を隔てているかのようだ。駆けまわる妖精は花を移る蝶であり語り合う人間は日を浴びる露である。気まぐれで定見がない。輝いているが命は短い。

力ある者もない者も同様に享受するまどろみのような時間が過ぎてゆく。ああ幻想郷とはなんとおぞましい悪平等の理想郷だろう。

命ある者は踊れ。命なき者は歌え。生死を越えた者は囁すがいい。

それが妖怪の神の悪魔のすべての幻想の行く末ならば終わらぬ酒宴に酔い続けるがいいのだ。

追記。酒が入った状態で書いたためわたしらしくもない非論理的な文章ができあがってしまった。気持ち悪い。破棄したいところだが飲酒の戒めとして残しておく。

※

ベルナルデイウス 『キルクルス・ラクテウス銀河』

たまには外に出ていっしょに星を見ろなどとレミイが偉そうに言うから外に出ないで星に関する本を読んでやった。

あとでデートの誘いだったのではないかということに気づいた。もうこの本は読まない。

※

周講之『七曜道論注』

蔵書を虫干しすべく整理していたらこの本が目にとまった。図書館にはわたしが書いた物の他にもよそではお目にかかれない魔術書や妖魔本が山のようにあるが中でもこの『七曜道論注』には格別の思い入れがある。

わたしが現在のように七属性魔法を使うようになったきつかけの本なのだ。

中国の前漢の時代に陸述が著した『七曜道論』に五百年後の南朝時代の周講之が注を施したものである。幻想郷の外では散逸してしまっており世界でここにしか残っていないだろう。

七曜とは陰陽を表す日月じつげつと五行を表す木火土金水もくかどこんすいを足した七つを指す。

五行の循環をあらわした相生相剋そうしょうそうこくは有名であろう。木は燃えて火を生み火は灰という土を生み……と循環する相生。金属の斧が木を切り倒し木は根で土を割り進み……と循環する相剋。

システマチックな相関係係ではあるがそれだけではどこまでいっても単線である。『七曜道論』はそれを複線化した。五行のうち二つが同時に存在する場合の相生相剋を理論化

してある。たとえば土と火が同時にある場合は何が生まれるのか。何を剋すのか。これを俱生俱剋ぐしやうぐてくといい『七曜道論』のもっとも独創的な部分である。『注』ではさらに詳細な考察が加えられてさながら中国的宇宙論の壮観なゴブラン織りだ。

俱生俱剋はわたしのスベルカードにも取り入れられてさまざまなバリエーションを生んでいる。

またこの『七曜道論注』は装丁も普通ではない。もとは宋の時代に印刷されたいわゆる宋版の本なのだが外側は西洋的な革装になっている。どういうルートでかヨーロッパに渡りそこで製本しなおされたのだろう。中を開けば中国の紙に漢字が刷られているが閉じれば完全な洋本に見える。ぬめるような光沢のある黒革で前の持ち主いわく「人皮をなめしたものだよ」とのことだがどこまで本当かは知らない。そこにいかにもまがましい字体の箔押しでラテン語訳された書名が印されている。ただ訳者がよくなかったらしく直訳すれば『七つの道路の物語』になっている。

表紙にはさらに薄くエンボスでのたうつ蛇だの人骨だのが描かれており本全体から受ける印象は実に悪魔デモニック的なものだ。正直に言えば悪趣味だがこの悪趣味さがなければわたしがこの本と出会うこともなかった。

前の持ち主はわたしとは感性が異なっていてこの本をとでも格好いいと思ひ読めもしないくせに悪魔アピールのためにいつも持ち歩いていた。だから前の持ち主とわたしが邂逅した際に自動的にその本の存在を知ることができたのだ。

その前の持ち主というのはおおかたのお察しのとおりレミリア・スカレットその人なのだが彼女が持っていたこの『七曜道論注』によってわたしの魔術は大きく様変わりした。運命というのがあるのならそれも。

それ以来わたしはレミイといっしょだ。

一言しておきたいがなにも『七曜道論注』が素晴らしい本だったからレミリアと友人になつたわけではない。たとえ彼女が持っていたのが『主に捧ぐ赤き竜の大きいなる秘儀と秘術』のようなクズ本だったとしてもわたしはレミイといっしょにいたであらう。

などと思いをめぐらせながら表紙を撫でてみると当の本人がひょっこり図書館に顔を出した。わたしの手にある本を見て「それ格好いいな。わたしに出来ないか」などと言う。元々自分の物であったことをすっかり忘れているらしい。

運命だのなんだのというさつきまでのわたしの思い出話はなんだったのか。まるでわたしだけが大事に思っているみたいではないか。

レミア・スカーレットというのはそういう存在なのだ。気まぐれで移り気で「あのと
きの出会いが懐かしいわね」などと感傷に浸ったりしない。心にも体と同じように翼が生
えている。ときに危うくもあるがどうしようもなく目が離せない。

それが彼女の能力というのならそうなのかもしれない。

とはいえカチンとこないわけではないので魔法で太陽を出現させてレミイを焼いてやつ
た。

※

パチユリー・ノーレッジ 『蠹魚閑話』

すなわちこの書のことだ。書中にその書自身のことを記述するいわゆる自己言及的な構
造にしてみたが特に意味があるわけではない。

もともと魔術書グリモワール以外の著述は無駄であると思っただけには、ときには琐事を記す気になるこ
ともある。本にまつわるそのような琐事がある程度の量に達したのでまとめて名前をつけ

ることにした。

蠹魚とは本を食い荒らす虫のことで紙魚しみともいい英語ではブックワーム。わたしのように読書に年を費やす読書家の比喩ともなる。

閑話はあだしごと。どうでもいい言葉のことだ。

『蠹魚閑話』を噛み砕けば『本の虫のむだばなし』ということになるだろう。このわたしの著述を読もうという者のうちに題の意味を取れないような愚者はいないだろうがいちおう解説しておいた。

無駄話なので内容もないし憶えておいてもいいことはない。読んだ端から忘れていくべきだ。そうしなさい。

手記

八雲紫の手記 第〇〇季 整理番号二十四 春の終わりに。

"

手記を書くという行為にはどのような意味があるのか。

という問いでこの文章を始めようと思う。

例えば、手紙、は情報伝達に必要だ。主に意思疎通という点において。口頭では補完しきれない細緻に至る言の葉と、そして、物理媒体での存在そしていつでも見直せるという保存性、そこには会話とはまたある種異なる意思疎通の趣というものがそんざいする。

またあるいは、本、は情報伝達に必要だ。思考を客観的に論じるために、あるいは特定の主観を想定して仮定的に論じるために。こちらの意思疎通はどちらかといえば一方的なものになるけれど、一方でその情報の広がりを目を向ければ、ただふれを出すのとはまた異なる効果があるだろう。

しかし、このようなりとめもない散文に、どのような意味合いが生じうるだろうか。と私は疑問を感じている。

生憎残念ながら私の思考力も記憶力も、自身のそれはかなり優れた部類に入っている。

それは一般の人間比では言うまでもなく、現在幻想郷に存在する妖怪というカテゴリで見ても、自分のそれは相当に上位にあるといってもまったく過言ではない。というのもあって、おおよそ一般的に言われる、動作プロセスを経て思考を出力する際に初めて行われる思考の客観視というものも、私は脳内でそれをシミュレートしてしまえている。現にこうやって手を動かしている間にも、いくらかの新たな思考がふいと生まれて、同時にそれら処理してしまっている。ということ、私に対して、手記を書くという行為による思考の浄化作用というものは残念ながら存在しない。

さて、改めて、手記を書くという行為にはどのような意味が生まれ得るだろうか。

あるいは、行為に対しては問わないものとして、この手記そのものには、どのような意味が生まれえるだろうか。

ということを考えていたところで、ふと珍しく思い至るといふ思考プロセスが私の中で持ち上がった。

即ち、これは私にとっての自己規定行為であるのではないかと。

何にもなりえない行為。それはいうなれば、カテゴライズされ得ない、冗長性を伴った行為。無駄、無用とはいえないまでも、何になるかと問われれば、すぐには答えを出せないカテゴライズの隙間にあるようなバツファ的行為。

スキマ妖怪と自らを名乗る私にとって、それは、実に私らしい行為ではないかと。

そう思っていたと、私が私として、このような手記を書くこともまた、必然であるのかもしれない。意味の有無でも、利実の有無でもなく、ただ、必然的になされるものとして、この冗長性が生み出されるのだと思に至ると、不思議な心地よさと安堵、開放感のようなものが去来する。

存外、このように、思考と文章とのスキマに位置する散文を出力している最中の、とりとめもなく筆を走らせる感覚というものは、例えば縁側で空を見上げて茶を啜るような心地よさを私に感じさせる。

今後、時折このような散文に向き合う時間が増えるかもしれない。という知見をもって、この散文を閉じよう。

追伸 宛―藍

今後、この文章と同類のものは、必要がなければ纏めなくてよろしい。

私が私的に綴じたもの以外については、目を通すか否かを含め処置の判断を任せます。

"



八雲紫の手記 第〇〇季 整理番号七十五 雨の頃合 マヨヒガの書齋にて。

”
そう言えばと思いきして、以前、外の世界を訪れた時の記録を探してみたところ、藍に破棄したといわれた。手記カテゴリに分類しておいたが、私が捨て置いていたために不要と判断したという。たしかにそうしてもいいものであったし、そう処理していいと伝えたのも私だ。と納得した一方で、そういえば私はどのようにあの村のことを綴っていただろうか、どうにももどかしい感情を抱かされた。

村の景色については、記憶に鮮明に刻まれている。感じた思いは今も変わらぬままだ。しかし、私自身が、それをどのように綴り、気の赴くままにまとめたかという冗長性については、どうにも私の記憶からも失われてしまったようだ。要点や概要、そういった構成要素に関してはいくらでも思い出せるけれど、はたして私はそれらを、どのように組みあげたのだったか。私はどのように言葉を選び、細部に思いを込めたのかということ、今はおそらく灰と消え、戻らぬ時間の向こう側の存在へと成り代わってしまったようだ。

思い出したきっかけは、おそらくとりとめもないことであつたのだろう。

例えば視界にとめる多種多様な存在の内のどれかが、無意識領域でトリガーとして作用したのかもしれないといったような、その程度のものだ。あの村は、今はどうなっているだろうか。と、外の世界の現在へと思いをはせながら、もう一度、あの村のことについて綴り直しておこう。

私は時折、外へ出る。それは調査といった意味合いもあれば、全く意味を持たない場合もある。その時はおよそ半々で、ふと外の世界の外周を回ってみようと思立ち、それなら併せていろいろ調べて回るのもいいだろうとの思考からだつた。

藍に一言、数日外すからと伝えてすぐに、私はスキマを開いて、少しばかり久方ぶりの外の世界へと赴いたのだつた。

ところで、潮の香りが想起させるものは何だろうか。

橙に聞いてみると、嗅いだことが無いからわからないという。「塩といますししょっぱいのでしょうか」というから、そうかもしれないわね。と答えはしたが。

私の記憶では、それは生活の香りと近い印象を持つ。

海に根差した港町から薫る、潮の匂いに混じり込んだ、磯、魚、燻製、人、等々、潮を土台として織りなされる人の生活のそれが、どうしても想起される。そういうことを想うのも、降り立った先が海沿いの町だったからだ。どうしてそこに降り立ったかといえ、そこから山間へと足を向ければ、ちょうど幻想未然の場所が広がっているからだ。

どうにも外の世界における現在では、色々なものが急速に失われつつあるらしい。

幻想郷といえ、成長を否定して、いずれ来る終わりを正面に受け止めたが、どうにももうしばらくは、今のままで続いていけそうではある。

それとは対照的に、こちら側は急速に成長した時に先送りした代償を、目を背けた影のツケを、これから支払おうとしているようで、その先行きは全く不透明で見えない。

そうした流動性の中にあつてこそ、人の営みといえるだろう？ とは誰の言葉だったか。流され、流水に削られて朽ちていく存在としては、ならばそうでないところで、静かな澗の下で静かに暮らしたいと思ってもいいだろうと思ひました。

「ねえさんどこから来たんだい？」

と声をかけられたのは、確か、そんな感傷に浸っていた時だと思う。

いつのまにか、しょぼくれた古老が隣に立っていた。遠いところからだと言えれば、此方の田舎に住む人々と変わらずに、ここはいいところだろうと続ける。

実際、悪くはない。

此方で生活するのに必要最低限の近代的テクノロジーが点在し、一方でこちら側にすれば程よくノスタルジックな色合いが残っていて、古風な色合いの中でなんとか暮らしているには十分だろう。

けれどもそれは現在に駆逐されて、かろうじて残った時代の残滓で、いうなれば現代と過去とがちょうど境界線上で色成して形成された風景のようで、あるいは今と昔の隙間がここにあるといえるのかもしれない。その曖昧な存在は思いの外私の琴線に触れるものだ

った。

この文章を書いている今、丁度外では雨が降っている。

草花と土と、苔とが入り混じった青々とした芽生えの香りが、雨の湿気に混じって鼻孔へとなびいてくる。海沿いで薫る水とはまた異なるものであるけれども、それもまた四季の流れの中でうつろうひとつの色香で、それもまた趣深いものだ。結局書くには至っていないが、また次の機会にしよう。それとも、もう一度訪れてみるのもいいかもしれない。

追伸 宛—藍

暫く雨が続くよう。今やるべき分が終われば数日外に向かってきます。

土産を買ってきます。好みのものがあれば式を飛ばしなさい。

”



八雲紫の手記 第〇〇季 整理番号七十八 梅雨明けの頃 外の世界にて。

私は今、この文章を外界の旅館で書いている。時折、こういった行楽に身をゆだねるのも悪くはないと俗世に染まりながら、六畳一間の片隅で、もう何年振りかねえと喜色をあらわにする老女将を思い出しながらこの文章を書いている。

夜も程よく更けて、旅館というには随分と手狭な湯船で暖を取った後には、ゆったりとたなびく風の音と沢の音が、きこきここと古臭い隙間風をたなびかせている。そうして外から入ってくる風の匂いにまじって、ここに香ってくるのはどうにも不思議な匂いだ。

この家屋の匂いは和のそれを主体としつつも、近代の色香が仄かに混じりこんで、マヨヒガで馴染んだそれとは似ているようで全く違うものである。けれど、それに混じりこんだ寂寞の色香のせいで、それとない居心地の良さと、あと幾分かのもの悲しさを伝えてくる。

外の暦においては、今日は休日であるらしい。なのにこの村の外には人の気配はない。道中、いくらかの廃村をスキマ伝いに訪れつつ、昼前に到着したこの村をゆらりと徒歩

で回った。湖の縁に沿いつつ碁盤状に成型された小さな村の中をゆらりと歩く。

人の目は憚らなければとわざわざ衣類を別のものにあつらえていたけれど、それもまったく思いもしなかった形で無用のものとなったのは、幸か不幸か。山から吹き下ろす風が、いつもと違ってラフな服装をはためかせることはなく、心地よく髪をかき上げて、そして谷の方へと流れていった。

後から聞けば、休日は山を下りて日用品を買いに出るらしい。つまりは、休日に訪れる人をもてなすのは、残るのみの人々であり、ここに住む人々の営みにもてなされるためには、それ以外の日を選んで訪れるほかないということだ。しかし、私であればそれは問題ないが、こちらの人々にはわざわざ平日を潰してここに来るような酔狂者はそう多くはないだろう。

とすれば、やはりこの村の人々の日常に触れられる旅人というものは随分と希少な存在であるのだろう。ということを考えながら、人気のない集落内を一人でぶらりと歩

いていた。

スキマの。と呼びかけられたのは、橋の上から湖をほんやりと眺めていた時だ。幼い姿をした子供が隣に降り立っていた。気配から察するに土地神である龍神だ。

久方ぶりだがなにかようか。と問われるも、なにも。と返す以外にない。

そんな彼もまた物好きともいえるかもしれない。

八坂の神のように移り住む者もいれば、この神のように残る神もいる。あるいはそのまま滅した神もいれば、また新たに生まれる神もわずかではあるけれど確かにいる。とはいえ神に限らず私を含めた日陰の有象無象は、科学の光に住処を追いやられて、自ら広げた傘の下で、余生を過ごしているというのが今の状況に近い。

思えばこちらの都市は久しく純化の一途をたどっている。

例えばアルコールを煮詰めて蒸留するように。

例えばふるいによってその粒を整えそろえるように。

恒星がその重力でもって衛星をつなぎとめるように、核となる都市は人を引き寄せて薄まらないように生き残ろうとし、それに対して、ちいさな場所はいろいろなものをそぎ落としながら、その作り出された鋭さをもって自らの重みを増そうとしている。

その純化の中には当然、緩衝地帯も、隙間もかき消されて存在しない。

まだ、残り続けるのか。と幼な神に問えば、続く限りは居続けるよ。と返される。

我々が住み続けられる余地があるならばそこに居続けるのが人に生み出された我々なのだろうよ。と。

そう。とこぼせば、そうだと。と彼の神は言う。

すべての存在はただただ引き伸ばして俯瞰すれば、創世と終焉の隙間に横たわるものではなく、そういう点では等しく同質で、転じればそれはどのように終焉に近づきうるかという見方でしか変化しないのかもしれない。私達を選べるものは、流れる大河の中で、おぼれながら何をつかむか程度のものでしかないのかもしれない。それでも、私は掴みたいという意思だけは強く心に残っているように思う。

それでも残り続ける人が生み出した幼い龍とも、改めて縁を結んでおきたいところである。

さら。と外で風が、水面を撫でる音がした。

明日、もう一度湖をみてから帰路につくでしょう。

追伸 宛—藍

この手記は綴じずとも良いです。

久方ぶりの海魚を買って帰ります。冷やしておくので後ほど、柚の果実酒と共に宵酒と
しやれこみましよう。

《了》

探し物

冬という季節は私にとっては特別だ。なにせ私は冬の妖怪なのだから。冬には起き、春には眠る。そんな繰り返しをどれほど続けてきたのだろうか。雪を照らす日の光は、私の目にはまぶしくうつった。太陽は夏だの冬だのそんなことを考えてはいないだろう。ただ、人間や妖怪のくだらない営みを見下ろすだけだ。だから日の光も変わらない。私は釈然とした。私は夏の一端を見ているのだと。そう考えたかった。春や秋、夏への眼差しなどないと答えたかった。いつも感じていた寒さが少し身を刺すように感じた。ちよつとだけ意地悪くとらえれば、私は冬という檻の中に閉じ込められた楽園にのんきに浮かんでいだけなのだ。まどろみの中で秋の涼しさにわずかながら触れたこともある。眠りの前に春の暖かさを惜しんだこともある。だが夏の暑さだけは私は知らない。冬の妖怪であるということに私は誇りをもっている。そんな私ともあろうものが天敵を知りたいとは。夏の妖怪なんてものがいたら、私と同じことを考えるのだろうか。私には永遠に知る機会は訪れない。

気温も天気も昨日とそう変わらない。その前の日とも。灰色の雲におおわれた空。白い雪がちらちらと舞い散る。風は冷たい。木々はとうに葉を落とし、雪をかぶっていた。青々とした葉を揚々と掲げる木々も見えてみたいものだ。でも私はこの光景が好きだった。

やはり私は冬の妖怪なのだ。

里の方はもうとうに冬の支度が済んでいるのだろう。春には畑を打ち、秋には穫り込む。では夏には何をするのだろうか。あの巫女にでも聞いてみればよいのかもしれないが、どうも気が進まない。大体、夏はどんなものかなどと聞いても、暑いものだという答えぐらいしか返ってこないだろう。私が知りたいのは絵に描かれた夏ではない。身に突き刺さる、冷たい夏なのだ。

ゆらゆらと漂うが、今日は珍しく妖精にも出会うことはない。一人、雪のように舞うだけだ。こんな折は人間たちのことを思い出す。この楽園の自然は厳しい。少なくとも私が知る限りでは、酒に酔いでもして、外でまどろもうものなら朝には冷たくなっている。そんな厳しい自然に対峙する人間たちはたくましい。彼らは炭を焼き、藁を編み、私たちに對抗する。私は嫌われ者なのかもしれない。だが、嫌われ者であるからこそ私は矜持をもてるのだ。楽園という言葉がしばしば皮肉に扱われることを考えると、共生とは時に激痛を伴うものであり、時に視線を交わしながらのものであることがわかる。夏に生きている間の彼らと私はたとえお互いが望もうとも、共存が許されることはない。さながら生きることと死ぬことのように。もつとも白と黒のように、相反しつつも共存が、更にいえば混

じり合うことが許されるものもあるが。私はあの魔法使いのことをふと思い返した。彼女は元氣だろうか。殺しても死ぬような人間ではないから、心配はいらないと思うが。

私は風にゆられながら、うだるような楽園のなかで過ごしてみた。照りつける太陽。青い山々。でも月並みな言葉を並べることしか私にはできないのだ。今度は袖をまくり、襟巻きを外してみた。地上に降りる。新雪を踏み荒らしながら、丘に立つ。吐く息は相変わらず白い。そんななかであつても私は少しだけ夏に近づけたような気がした。雲の切れ間からわずかに顔をのぞかせるお日様が私に向かって笑いかけたようだ。その笑いが、果たして微笑みなのか、それとも嘲笑なのか、私には分からなかった。

丘を下りて、林の中に分け入る。私が眠っている間だったらきつと一苦労だろう。ぽたりと雪解けのしずくが腕に落ちる。もうすぐ春なのかと一瞬勘違いしてしまった。だが勘違いできるだけありがたいのだ。どさりと、近くに雪の塊が落ちてきて粉雪が舞い、引き戻された。いつのまにか空をおおっていた雲は引き裂かれ、木々は影をつくっていた。この影が濃くなる季節を遠くに臨みながら、私は空を眺める。辺りは雪の降る音が聞こえるほどかと感じた。今、生命は息を潜めているのだ。彼方にあるやかましさを私は思った。私がそこに聞き耳を立てることはこれからもない。

いくつ、数えた頃だろう。子供たちの賑やかな声の中に私は引きずりこまれた。雪靴を履いた子供たちが雪合戦をしている。遠くにあったものがぐんと近づいていた気がした。でも私は数を数え、手を伸ばすことぐらいしかできないのだ。少しだけ、冬の風が身に染みる気がした。結局、そんなものなのだ。無理矢理にでもそう思ったかった。

日が落ちるころ。遊び疲れた子供たちは手をつないで帰るのだった。彼らが私に気付くことはついになかった。私はこの楽園の掟を思い出しながら、一人あてもない帰路について。妖怪と人間はたとえそれが形式的なものであろうと、敵対的關係を崩すべきではない。そんなことを思い返しながら漂う妖怪はさぞ滑稽に見えたことだろう。私が求めたものは一体何だったのだろうか。そんな私の相手をしてくれるのはやはり北風だけなのだ。《了》

春、三月

○三月某日（編注・十六夜咲夜の日記）

十二時の鐘が鳴り終わる。レミリアお嬢様が外出される。

念の為、日傘は雨傘兼用の物、ハリケーランタンと固形燃料を所持。

（固形燃料は残数一。要再発注）

午前零時三十分。霧の湖を遊歩中、わかさぎ姫を見つける。なます切りにしたつもりが
できなかったらしい。ただ、今は作業中であつたし、お嬢様も気にしなかつたので不問と
する。

午前一時。お嬢様がお疲れとなつたので、机と椅子（三番倉庫・アンティーク調五番）
を用意する。後ほど、妖精に掃除の命令。

午前二時。紅茶をたしなんでおられる所に、化け蛍がやってくる。追い払おうとも思つ
たが、お嬢様の命令により弾幕ごっこの開始。そのまま、季節外れの『夏は夜』となる。

蛍の光は明るかつた。お紅茶を飲み終え、お嬢様の蛍狩りを終えたのを見計らつて、弾幕
ごっこの終了。

……ナイフが足りない。新しく仕入れなければ。

午前三時。人里に着く。夜の人里は陰気である為、お嬢様にはあまり似つかわしくない。

とはいえ、細々と妖怪目当ての居酒屋も開いているので、相応に明るい。なぜか命蓮寺の尼僧がいたので一言、忠言を言っておく。多分、耳には入っていない。今日は宴会という気分ではなかった為か、お嬢様はそのまま、散歩をお続けになる。

午前四時。人里の運河沿いに誰かいる、と思ったら西行寺幽々子だった。幽霊の正体見たり枯尾花を実践する不思議な人である。

お嬢様の命令により、ワインを持つてくる。

『サクラ・プシユェリ・パル・レ・ファントゥム（幻想郷第二百二十八季）』

マリアージュはチーズ（製造・高坂農畜）

（ワインは残数五十八本。チーズは四塊）

（二番倉庫・ゴザを使用）

午前五時半。お二人の飲酒が終わわり、帰路に着く。

午前六時。朝焼けが近づくと同時にご帰宅。そのままお嬢様はご就寝。寝ていた美鈴には説教を施す。ついでに妖精に机と椅子の清掃を命じる。

午前七時。パチュリー様の朝食を作り、そのまま運ぶ。

午前八時。一時休眠。これにて一日の区切りとする。

○三月某日（編注・幽谷響子の日記）

早朝、寺に参拝。毘沙門天さま（編注・仏像）にお参りをした後、お勤めを開始。お日様が出てくると同時に、毘沙門天さま（編注・寅丸星）に挨拶をする。その返事を受けて、そのまま大声の挨拶。

まず初めに村紗さんが起きてくる。境内の水打ちをし始める。眠そう。次に一輪さんが帰ってくる。何か二日酔いしてるっぽい。咲夜さんがどうのこうのと言ってるけども、何があったかは知らない。

一輪さんが水を飲んで二日酔いを抑えようとしている時、ナズーリンさんが食材を持ってきた。

今日はナズーリンさんが当番。麦飯と大根の煮つけと奈良漬。豆腐の味噌焼き。なかなか豪華だった。「ほーえの時に粗末な物はだせないから」と言っただけで食事が豪華になっているの、本当に貴い。

朝食が終わると、在家の人々がやってくる。

在家の人たちと一緒に本堂の掃除に入る。今日はついだから大掃除をしよう、という

ことで大掃除を始めることになった。

特例を受けて、昼食の仕込みを始める。

大根の葉が入った味噌汁、ほうれん草のおひたし、いぶりがっこ、川ノリの佃煮、わさび飯。

豪華。美味しかった。掃除は大変だった。

○三月某日（編注・本居小鈴の日記）

・一日の行動

朝、稗田邸に本の受け取りに出張。

昼前、帰宅。

・返本記録。

稗田阿求さまより返本。『安部野童子問』『囲碁発陽論』『雑誌 I R O N M A N（アイ

アンマン）』。

状態は良。

蕎麦屋『蕎麦 武蔵屋』さまより返本。『蕎麦是非問答』『食材研究 NO・一三八』そ

ば粉を語る』

いずれも良好。

アリス・マーガトロイドさまより返本。『人形の作り方（浜田明子 著）』『糸（ミク
ロの世界）』『吉田式2・球体関節人形 制作指導書』

磨耗が少ない。あまり読んでいない模様。

以上、三名からの返本。修理の必要性は特になし。それぞれを元の棚に戻しておく。

・所感

にくきこと。稗田のお嬢様からのご指名、一日たむろする客、薬屋さん。

稗田のお嬢様から返本したので取りに来てくれという連絡。ええ、ええ。相手はお得意様ですもの。本の受け取りだっけ行きます。でもでも、人選をしなくたっていいじゃない。あの御家は（そりゃ今回は本が少なかったけども）いつも本が多いんだもの。

これが『辛いので少しづつ』といかないのが零細自営業の辛いところ。お客様の為ならえんやこら。

はあ、とため息が一つ。

一日たむろしている客は何がしたいのやら。本を借りるでもなく、着かず離れず。場合

によつては一日中店内にいる。珍しく行動にうつしたかと思えば、音も気配もなく、本を作業台において顎で指示をして（それすらしない奴がいる!!）手続きを始めると矢の催促をする始末。薄気味悪いつたらありやしない。

はあ、とため息が二つ。

薬屋さんがやってくるのは、お仕事お疲れ様です、として。内容か何を言っているのかチンプンカンプンである。

切り傷の軟膏がある。それはわかる。ただその説明に、硫酸コリスチンだとか硫酸コリマイシンだとか、バシトラシンなんて言われてもわからない。

はあ、とため息が三つ。

平和が欲しい。

○三月某日（編注・鈴仙・イナバ・優曇華院の報告書）

朝食を終えて、人里の所へといく。

午前、三軒回る。

布団屋さんへダニ避けの防虫剤（P・メントラン一三三・八一ジオール）。一つ販売。

田中さん、山瀬さん、弓削さんの家にゴキブリ退治用のエサ（ファイプロニル／フェニルピラゾール系）○.○五パーセント（w/w）。

その他、アセトアミノフェン／イブプロフェン／エテンザミド混合解熱剤が二つ。

イブプロフェン／トラネキサム酸混合、喉風邪薬が四つ

リン酸ジヒドロコデイン／D1・メチルエフェドリン塩酸塩混合咳止め薬が一つ。

ここで診察希望の方が現れたので案内をする。

○三月某日（編注・八意永琳）

鈴仙が患者を連れて帰って来た。

所見。本人曰く、

『夜中に突然ロウソクが消えたみたいに頭がボケつとする』

『あまりにおかしいから色んな人に診てもらった。加持祈祷も意味がなかった』

とのこと。

一見すると異常無し。血圧、脈拍、呼吸、体温、どれも異常なし。握力にやや難あるも、手足の運動に深い影響があると思えない。脚気などの生活習慣病もなし。

鈴仙を従えて脳波検査（通常状態、睡眠時、速い呼吸、点滅光の四種類を何度か）、および、核磁気共鳴画像法による脳内検査。

3ヘルツ棘徐波、ならびに、大きくブレる反応が有り。

念の為、紙に転写。

核磁気共鳴図画法による脳断面図も、記録。

脳の形状、血管の状態など、特に問題なし。

腫瘍の類はなし。

病名確定・てんかん（全般性・欠伸発作）。

パルプロ酸ナトリウムを調合。毎日五百ミリグラムの摂取を指示。

・患者への説明。

脳は神経の集合体であり、電気が走っている。感覚としては導火線に近い。その導火線の交差点で、接続不良が起きており、走ってきた火が大きく燃え上がる。

この大きな燃え上がりが貴方の脳内で起きている。

大きな燃え上がり（脳の電流での火花）が、脳全体に影響を及ぼす。そのせいで立ったまま失神している。

パルプロ酸ナトリウム毎日五百ミリグラムの摂取を指示。

二次災害によつては死に至る為、乗馬など危険な行動は慎むように指示。

脳が興奮すると発作が起きる為、睡眠時間の確保と飲酒を控えるようにも指示。

単独行動の是非について問われたので問題ないとは指示をだした。幻想郷は危険ではあるが、その分、人通りのない所へは行かないであろう。

所感。

この病気のやっかいな所は自覚症状である。治療完了という診断までは、投薬治療しかない。一方で、患者自身にしてみれば、自覚症状すなわち発作なのだ。

『発作がなくても病気』という意識はなかなか根付きにくい。風邪を引いてない時に風邪薬を飲まないように、発作が少なくなれば薬の摂取を怠りやすい。

言うことを聞いてくれれば良いのだけど。

○三月某日（編注・上白沢慧音）

義経記を用いての授業。

義経が官位を賜った時の云々の話となる。

これを説明する時に、度重なる莊園整理令と荒れる坂東地方を説明。いわゆる源氏側が婚姻を繰り返して縁を強化して一致団結していたのを無下に扱ったからだ、と続くのが主旨。

以下、所感。

・伊吹萃香

うん、貴方なんでそこにいるの？

・嘉藤ヤマメ

落ち着きがない。

まじめに授業を聞かすにはどうするか。何か成功体験があれば問題ないのだが。とにかく、興味を惹く分野を捜すしかない。

・金刺盛貞

授業をマジメに聞いている分には問題ないが、戦術理論に走りすぎだ。

狩りをする分には問題ないが、机上の空論を説いている場合ではない。ただ、戦術理論から地理把握、人心にまで考えを巡らせる所はいけるか？

・菊地キキヨウ

いつも大人しく聞いている。挙手の回数も多い。試験の点数に影響が出れば心配しなくてもいいのだけだ。

・佐々木略（通称・干支ノ介）

坂東の地理に関しての理解が甘い。

全体像を捕らえすぎであろうか。ともかく、次回は地図を運用する。

・内匠（タクミ）雅臣

馬にしか興味がない。馬に絡めるか。

・ノヴェール（姓）シャルロット（名）

侍幻想が強すぎる。この時代の武家武士をもう一度説明する必要がある。あと陰陽師もそこまで大した仕事してない。西行法師あたりから日本文学史でもやれば、歴史に興味をもってくれるであろうか。

・圓尾ユキ

人物関係性の理解が深い。

歴史に強くなりそうな分は問題ないが、現実だと人間関係の摩擦で精神が疲れそうである。注意はしておこう

・三嶋ナギ

表情が暗い。

何か心配事があるのだろうか。数日、注意して見ていきたい。

・三輪頼忠

大人しく聞いている分には良いが上の空。

親御さんと話をしなければならぬだろうか。

・六角義衛門

寝るな。

・横山裕三郎

状況と律令関係に強い。ただ人間感情の機微を疎かにしすぎている。人間関係の齟齬を

生まないか心配。

・反省

いささか口伝えが多く、板書が少なかった可能性がある。

明日以降は地図も使う為、板書に時間をさこう。時間に余裕があれば年表も用いたい。

○三月某日（編注・ミステリア・ローレライの日報）

品名	原価	売価	利益	利益率
ヤツメウナギ	六銭	十銭	四銭	四十パーセント
イノシシ	十円	(商品数・百)		
(モモ)	一円五十銭	(三十皿)		
(单品単価)	十銭	十五銭	五銭	三十パーセント
(ヒレ)	八銭	(五皿)		
(单品単価)	十二銭	十五銭	三銭	二十パーセント
(ロース)	二円五十銭	(十皿)		
(单品単価)	十三銭	十五銭	二銭	十パーセント
(カタロース)	二円	(二十皿)		
(单品単価)	十三銭	十五銭	二銭	十パーセント
(マエ／前肢)	一円五十銭	(五十皿)		

(単品単価)	三十銭	三十五銭	五銭	十パーセント
(バラ)	一円五十銭(二十五皿)			
(単品単価)	十八銭	二十銭	二銭	十パーセント
(スネ)	三銭	(十皿)		
	三銭	五銭	二銭	四十パーセント

今月の場所代と因幡兎への感謝料も大丈夫。

良質のイノシシが手に入ったので、大盤振る舞い。

珍しいということ、回転率が良い。ただし、酒の出も激しいので、利益率はやや低め。害獣だから取りたがっているようだけど、あまり何度も来られると辛い。

基本的には儲け度外視でやっているけども、料理を分けて作るのが辛い。

ああ、面倒だああ面倒だあ。

でも、人間を〇〇〇(編注・自主規制用語使用の為、削除)にするのは楽しいなあ。

《了》

青

青は不思議な色であると、前に読んだエッセイに書いてあった。空の青と海の青について書いており、どちらの青も幻だと言っていた。空の青は飛行機に乗って近づくと、海の青は水を手で掬うと失われるという。私には分からなかった。

今日も生憎の雨模様だ。梅雨は好きではない。本を借りに来る人も少ないし、何より湿気が厄介だ。寺子屋の子供たちなら、蛇の目で母親が迎えに来るのでも楽しみにするのだろうか。だけど私はこうやって一人店番だ。雨脚はだんだんと強くなっていく。黒い雲が空を覆っていく。じきに雷も鳴るのではないか。外の世界では、色とりどりの雨傘が咲き乱れているのかもしれない。当然鈴奈庵に来る人たちの傘はそんな華やかなものではない。

一人の世界はフィクションの中に入り込むことに似ている。フィクションを読むとき、私たちは常にたった一人の傍観者だ。不死身の英雄の活躍も、星々を行き交う宇宙船も、愛し合った者たちの悲劇も、私は離れた場所から見ることしかできない。そんな折、私はあのエッセイのことを思い出した。私は小説よりもエッセイの方が好きだ。傍観者でいるよりも、対話者になろうと努める方が性に合っている。しかしエッセイを借りにくる人は少ない。集団の中では一人の世界に浸る方が楽しいのかもしれない。それにたびたび起こる異変を書き留めるだけで何冊も小説が書けるだろう。私以外の幻想郷の住人にとって日

常の延長線上にあるのはエッセイではなくフィクションなのである。更に言ってしまうと、いくら対話者であろうと努力したところで、私が声をかけることはできないのだ。

私にとって海の青は本来の意味でのフィクションのようなものだ。もちろん写真を見たことはある。しかし私は潮風を浴びたい。しょっぱい水を口に含みたい。打ち付ける波に足を浸したい。そんな叶わぬ願いに少しでも歩み寄るため、私は書棚の前に立って、日常を塩辛い水の中に浸そうともがくのだ。

先日読んだエッセイを再び書棚から取り出し、目を走らせる。著者は雨を空の青みに至る再生のための恩寵とみなしていた。私は空を見上げた。まだ雲は黒錆のような色を見せていた。断片でもとは思ったが、青は少しも顔を見せなかった。背伸びをして著者に語りかけてみるのには、もう少し時間がかかりそうだ。もともと私に答えが返って来ることはないのだろうか。

空の青はエッセイの延長線上にあるのだろう。二つの世界の空はつながっているが、そのつながりを想像しても、熱を帯びた現実は容易に喉を通り過ぎてしまう。でも喉の乾きが激しくなるにつれて、私の中でフィクションとエッセイの境界線は曖昧になっていくのだ。そしていつか私は物陰から飛び出して語りの輪の中に入ることができるのかもしれない。

い。そんなとき、日常を塩辛い水の中から取り出して飲み込むことができるのだろうか。

空の青を見ると、まだ見ない海の青をどうしても重ねずにはいられない。だからこそ、両方の青は幻であるともいえるのかもしれない。そう考えると、日常と非日常の境界線は、たとえ幻想郷でなくとも、至る所に引かれているのではないだろうか。そんなことをふと考えてしまった。幻想郷という場所は特別であると感ずることもあるだろう。しかし、外の世界が特別でないとはどうして言えるだろうか。外の世界の人たちが幻想郷を知らないのと同様に、私たちも外の世界を知らないのだから。そんな二つの世界をつなぐ開き窓をそつと開いて覗いてみるときに、私は外の世界の空の色が幻想郷の青空とは少し違う青ではないかと考える。でも目に映る青はやはり変わらないのだ。ただ一つ、違う点を挙げるとすれば、私の目に映る青は二つの世界の青よりも幾分か群青色に近いことだろう。憧れというものは、目を曇らせてくれるのだ。

雨はいつの間にか上がり、太陽と共に青が雲の切れ間から姿を現した。これでようやく背を伸ばすことができるのだろうか。幻を見るためには、曇った目でなければならぬ。自然と苦手なはずの雨に感謝したい気分になった。もちろん背を伸ばしたところで、著者と同じ位置から青を見ることはかなわない。そうであっても、私は一生懸命背伸びをする。

たとえ飛行機に乗れなくとも、海水を掬うことはできなくとも、語りかけることはできるはずだ。そのとき、分からなかつた問いの答えの一端に触れさせてくれるだろう。

そんな期待を裏切るかのように、すぐに青の切れ端は薄黒く塗りつぶされてしまった。しかし私どこか喜びを感じた。そのとき初めて、著者が私の方を向いてくれたような気がしたからであった。エッセイの結びの一文のように遠くで響く雷鳴が、私への返答であるように思われた。《了》

食堂九千尺

朝起きて雪解け水そのものの温度で顔を洗ったあと、行く場所がある。

宿舎二階の大食堂である。三尺の檜板に「九千尺」と書いてある。

入口の扉を開くと、湿気に、その時の料理の匂い、そして南側に広がる大きな窓。一時いちどきに二百名は収容できる山のご自慢の大食堂。尤も、ここに人間は滅多に來ない。

夏至の时分には朝の四時には茜がさして一刻もすれば真昼のごとく。ただ、宿舎の周りの雪は溶けきっていない。

この山の天狗の朝食というものは簡素なもので、蕎麦粉のおやきが二個に汁物。以上。気の利いたものなど無いが、司厨士の腕は利く。百余年この暮らしをやってきて食堂の料理の味に不満を覚えたことなど無い。人間であれば代が変わるところを同じものが延々やっているのだから当然である。

おやきの中は青菜の古漬け、汁にはその日替わりの適当な山菜。蕎麦の甘みと菜の塩気が丁度良い。

南面する窓に並ぶ一人掛けの席から雲海の照り返しを受けて咀嚼する。

「(一)馳走様でした」

返却口に御膳を突っ込んで食堂を後にすれば、部屋に帰ることもない。取材の装備は済

ましてある。

一日が、始まる。

一日中、里や山を飛び回ってネタを拾って宿舎に帰り、取材道具を置いて行く場所がある。宿舎二階の大食堂である。三尺の樺板に「九千尺」と書いてある。

入口の扉を開くと、湿気に、その時の料理の匂い、そして南側に広がる大きな窓。一時に二百名は収容できる山のご自慢の大食堂。尤も、ここに人間は減多に來ない。

短い夏の盛りと言えど、夕暮れ時には暖房も恋しい標高二七〇〇米。朝には晴れても午後からは雲に包まれなお冷える。

今日は特食日で、食堂の外にまでいい匂いが漂ってくる。月に一度のカレーの日だ。夕食時間開始前から行列ができる。行列に並ぶもよし、空いた頃に味わうもよし、今日の気分は前者だ。一尺の大皿に米飯が盛られ、カレーのルウが添えられる。馬鈴薯、人参、玉葱を基本として季節の野菜が加わる、事もある。冬から春にかけては当然具も減る。幸いこの時期は茄子や青豆の類も加わって彩りがある。香辛料は、飽きが來ないように徐々に

変わっていつて、それでいて外れはない。大匙で口いっぱい頬張ると、程よい辛さ。

南面する窓に並ぶ一人掛けの席の向こうに時折西からの陽が差す。

「ご馳走様でした」

返却口に御膳を突っ込んで食堂を後にすれば、部屋に帰って記事の整理。取材の成果は今から調理する。

一日は、終わらない。

午後十時
戌の刻に、目を覚ましに向かう場所がある。

宿舎二階の大食堂である。三尺の檜板に「九千尺」と書いてある。

入口の扉を開くと、湿気に、その時の料理の匂い、そして南側に広がる大きな窓。一時に二百名は収容できる山のご自慢の大食堂。尤も、ここに人間は滅多に來ない。

里より二足早く訪れた秋の気配は稜線を黄や赤に染めて食堂の暖房の色へと既に移った。

この時間は非番で酒を飲みに来るもの、自分のように夜業の力を入れに来るもの、あるいは眠れず暇を持て余したもの、いろんなものがある。

厨房の司厨士はまだ複数名で回している。酒のつまみを出したり、明日の仕込みをしたり、やることがないわけではない。

濃いお茶を頼む。少し待つと、お茶の入った急須に湯のみと適当な茶菓子を盛りられた小皿、今日は幸いに羊羹である、の揃ったお盆を渡される。

私のいつも座る席の隣には、はたてが座っているのを確認できる。

「こんばんは」

「文も今夜はまだ仕事？」

「今日中に纏めておきたい案件がありました」

「ご苦労様ね」

「はたては」

「紙面の構成を考えてたら疲れたから休憩」

「ご苦労様です」

「お互い様ね」

「ええ、お互い様です」

特に中身のある会話をするわけでもないが、仕事の労苦は多く言葉を交わさずとも共有

できる。

私が先にお茶を飲み終わったあたり、はたては構成に難航しているようだ。

「ご馳走様でした」

返却口にお盆を突っ込んで食堂を後にすれば、部屋に帰って記事の執筆作業。

仕事は、終わらない。

朝の十時の太陽に照らされて目が覚めた。寝坊したということでもないが、朝食の時間ではない。昨日に雪が降った温度の中で顔を洗って行くところがある。

宿舎二階の大食堂である。三尺の檜板に「九千尺」と書いてある。

入口の扉を開くと、湿気に、その時の料理の匂い、そして南側に広がる大きな窓。一時に二百名は収容できる山のご自慢の大食堂。尤も、ここに人間は減多に來ない。

もう私達の世界は冬になった。五千尺、メートル法で一五〇〇米のところまで紅葉は降りて、里山はまだ緑が残り、田には稲穂が金色に輝く彩りの季節。新米はあと少し、先んじて新蕎麦が出回り始めた。

朝食時間から昼食時間までの間、本式の朝食とは違う「モーニング」なる品がある。具なしおやきとでも言ったもので、蕎麦粉を捏ねて薄く伸ばしたものを焼いたものだ。西洋ではガレットともいうらしい。これ数枚に小豆餡なり味噌なりを付けて食べる。もとは吞助共が朝起きて来られずに、かと言って昼まで待てないから何か都合がつかないかという経緯で考案された品だ。最近は休暇で遅寝をするものもよく食べにくる。蕎麦の甘みに、小豆餡の位相の違う甘みが加わるもよし、味噌の塩気と調和するもよし。

南面する窓に並ぶ一人掛けの席の硝子隔てた向こうには、一番美しい時期のこの里の景色が広がる。

「ご馳走様でした」

返却口に御膳を突っ込んで食堂を後にすれば、書いた記事を見直して適宜追加の取材へ行こう。

仕事は、いつでも始まる。

宿舎玄関の風速計の表示は毎秒五〇米を超え、屋外の温度計は零下一〇度を指し、気圧

計も七〇〇ミリバールを切っている。流石にこの条件で外に出るのは天狗といえど無茶がある。吹雪に飲まれて手持ち無沙汰になった午後の三時に行くところがある。

宿舎二階の大食堂である。三尺の檯板に「九千尺」と書いてある。

入口の扉を開くと、湿気に、その時の料理の匂い、そして南側に広がる大きな窓。一時に二百名は収容できる山のご自慢の大食堂。尤も、ここに人間は滅多に來ない。

二階冬季玄關の運用が始まった。秋に穫れた食材には恵まれると同時に、本格的な冬支度をしなければならぬ。北と西向きの窓は、季節風に備えて雨戸を打ち付けてしまふ。

午後の喫茶時間にはちよつとした焼き菓子類が提供されることもある。小麦粉や蕎麦粉の焼けるいい匂いが、食堂の重みのある出入口の扉を開けた瞬間に鼻に入ってくる。

急須に入った紅茶に今日は蕎麦饅頭が付いて出た。いつもの窓際の席に座れば、目の前は灰色の空の中を駆け抜けていく雪の嵐。皐月の頭まで繰り返される光景。

こういう時は過去の新聞を漁ったり、あるいは純粹に何もせず思考を停止して時間が過ぎ去っていくままに任せる。万年筆を分解して掃除したりもする。休息も仕事のうちだ。

二杯目を飲み終わる頃に、髪が伸びていることに気づいた。もうそういう時期か。

「い馳走様でした」

返却口にお盆を突っ込んで食堂を後にすれば、理容室を偵察に行く。

記事を書くだけが、仕事じゃない。

月明りが一面白に覆われた世界に跳ね返ってやたらと眩しい。草木どころかすべての命が眠ってしまったかのように雪に覆われた丑三つ時午前二時にやにわに起きて行くところがある。

宿舎二階の大食堂である。三尺の檜板に「九千尺」と書いてある。

入口の扉を開くと、湿気に、その時の料理の匂い、そして南側に広がる大きな窓。一時に二百名は収容できる山のご自慢の大食堂。尤も、ここに人間は滅多に來ない。

年も明けて如月になった。外の世界は梅の花も咲き出すところもあるだろうか。里は雪の中、山の上は深い雪の中、春はまだ遠い。

有事に備えて食堂は二十四時間営業である。急の異変であったり、災害であったり、臨時の糧食供給に備えて深夜も司厨士が一名は居る。

尤も、深酒をまだ呷り続けているものであるとか、夜業の休憩に立ち寄るものの相手が主な仕事であるが。

古くから馴染みの司厨士が当番で、眠気の飛ぶものを頼む。酒二升は拒否したので代わりのものが出てくる。今日はたんぽぽコーヒーではない本物の珈琲が出てきた。

いつもの南側の席は、この時期の吹雪の日の昼間よりも明るい。窓側の照明は落とされていても、本が読めるほどだ。帳面を持ってきてここで仕事をしても良かった。

二尺先の硝子の向こうは極寒の世界。冷えて澄み切った空気が冬の星座の煌きを増している。時折訪れる食堂の静寂に、星の囁きが聞こえてきて耳が痛くなる。

「ご馳走様でした」

返却口にお盆を突っ込んで食堂を後にすれば、目も覚めて朝駆けと意気込もう。
なにか起こる予感ほだいたい外れるけれども。

春は地から湧き上がってくる。雪の溶けた里の地面に草が芽吹き、それが木に移り、五千尺のところまで鮮やかな萌黄に覆われると、田植え前の水鏡の中に桜の色を見ることが出来る。午後から天気が崩れそうなので取材を切り上げて山に帰ってきた正午に行くところがある。

宿舎二階の大食堂である。三尺の檜板に「九千尺」と書いてある。

入口の扉を開くと、湿気に、その時の料理の匂い、そして南側に広がる大きな窓。一時に二百名は収容できる山のご自慢の大食堂。尤も、ここに人間は減多に來ない。

昼は弁当をもらって里で食べたり、里で人間に紛れて蕎麦を啜ったりもするが、山の上で食事をするとなればこの大食堂に來るばかりである。

今日の昼は蕎麦切りだ。皿に盛られた蕎麦に山菜の天麩羅と汁が付いている。細かく引いた粉で打っているから麵に甘みがある。それがふきのとうの天麩羅の苦味と合う。

「はたてもたまには里でお昼くらい食べたらどうですか、色々ありますよ」

「ここでも十分美味しいから」

隣の席で先に蕎麦をすすっていた先客に声をかける。

「新聞は出来てますか」

「まあまあね」

「たまには体動かしてネタ拾わないと体が鈍りますよ」

「そう言うと思つてたわ」

はたては携帯を取り出して少しじつって画面を私に見せてくる。

「これは、なかなか。おみそれ入りました」

「たまには私もこれくらいやらないと」

私の知らない山の景色が確かにそこにはあった。

「ご馳走様でした」

返却口に御膳を突っ込んで食堂を後にすれば、後輩の成長に喜ぶものがある。

これから先、繰り返されていくもの。

ただひとつとして同じものはないのだから。《了》

昼下がり

昼下がりに。その日も雨は降っていなかったもので、いつもの約束でお茶をするために図書館を出て紅魔館の庭先に出た。けれども今日に限ってレミリアの様子がおかしい。咲夜のほうを見てみると、咲夜は咲夜で愛想笑いのような、ばつの悪そうな顔をする。昨日お茶を飲んだとき、何かあったかしら。けれどそんなことで機嫌をそこねる彼女ではなかったはず。

「どうしたの？」少しこわばったまま聞いてみると、「ああ、聞いてよパチエー！ 原稿がボツになっちゃったのよ！」と大きな、ため息をつくような声。勢いがあまりに良いので、少し咲夜のほうを向いて気をそらす。「ねえ咲夜、そうなの？」苦笑いする咲夜。レミリアはレミリアで、とにかく愚痴が言いたくて仕方なさそうだ。

「とりあえず、お茶を飲みましょう？ 話はそれから」そう言ってカップに手を遣ると、レミリアも「そうね」と不機嫌そうにうなずく。あたりに目をやると、湖のあたりの霧がいつにもまして憂鬱そうな姿を見せている。湖の向こうの森には雲の傘がかかり、今日は空も少し不機嫌なようだ。

カップを置く音が聞こえる。レミリアの口許からは言葉がせきを切って飛び出してきた。『このあいだね、『日常を描く随筆をみんなで書きましょう』っていう話が来たのよ』。

ええ、それなら私のところにも話が来たわ、と相槌を打つ。「そうそれよ。おもしろいと思つて私もいくつか書いてみたのよ。でもどうしても気に入らなくて」。

「そういうこともあるわね」

「どうしようと思つていたんだけど、『幻想郷勝遊録』があつたことを思い出したの」

「あら、あの本？」

「そうよ、あの本よ。いつだったかしら、人間が漢詩集を送つてきたのは」

「去年くらいだったかしらね」

「そうそう、あれ以来、私ずいぶんあの世界を楽しむようになったじゃない」

あの世界というのは、漢詩文の世界である。『東方漢詩合同「折楊柳」』という本が届いて、レミリアに手ほどきしたのが去年のいまごろ。それからレミリアは私の書齋にときどき訪れては漢詩文のことを尋ねるようになり、そのうちに自分でも詩文を作るようになった。ふつう、自由に作れるようになるまでには数年かかるものなのだけれど、ほんのわずかな期間でものにしてしまつて、私のほうが驚いたものだ。

そうしてできたのが詩集『幻想郷勝遊録』。勝遊録というのはよい景色をめぐつて遊んだ記録というほどの意味。漢詩文の視点から幻想郷を描いてみようという試みで、あわせ

て咲夜と森近霖之助氏の和歌の贈答も入っていておもしろかった。私もレミリアに頼まれて序文を書かせてもらったものだ。けれどもあれは基本的に漢詩集——

「要項にね、『何をもって少女達の日常とするのか。すなわち、随筆とは何か？』といった部分は、書き手の方々の解釈にお任せいたします』って書いてあったから、これこそまさに私の日常！』と思つて、全部は無理だから、一部を抜き出してね、咲夜に注をつけてもらつて、投稿したのよ」

「そうなのね」

このさい曖昧に相槌を打つ。

「そうなのよ。そしたら『これは「随筆」じゃありません』って連絡が来ちゃつたのよ！」

「随筆のつもりで、随筆じゃないものを投稿してしまつたわけね」

「そういうこと。それで、どうしましょって問い合わせたら、『もう一度書きなおしてください』ですつて！」

「あらあら、おかわいそうに」

「でも、もう締め切りも近くて、どうしようかと思つちやつて」

控えている咲夜のほうを見ると、微笑んでいるのは口許ばかりで、眼は相変わらず俯い

たまま。よほどずさんでいたに違いない。

「咲夜。あれを出して」

はい、お嬢様——そう言つて咲夜が取り出したのは、ちょうど話題の『幻想郷勝遊録』。
レミリアはそれをおもむろに手に取つてめくりはじめた。

* * *

「見て見て、これ。パチエに書いてもらった序文」

遠方有朋、近人亦然、紅魔館主斯蕾莉、是吾朋友也、每晴飲紅茶而與談、或時一書到于異界、曰折楊柳、館主未得讀鳥跡、故余讀之而解、館主欣然、其後館主屢訪圖書室、讀古籍、屢問余、余酷愛讀書、以悅答之、而後蓋有所得、賦一詩而示余、余裁之、館主再示、余再裁、終至爲好詩、以是與游山界曲灣、風韻縷相娛、互賦詩而頻應酬矣、爾後館主示余草稿、而屬其序、余喜而識之、亦不樂乎、

知泉 姫帕莉識之

「ええ、書いたわね」

レミアアは話したくてしようがなさそうだ。投稿文がボツになった鬱憤をここで晴らしてしまいたいのだろう。私もいつも話を聞いてもらっていることだし、今日はしばらくこれにおつきあいかしら。

「うふふ、読むわよ——

遠方朋有り、近人亦た然り。紅魔館主斯蕾莉、是れ吾が朋友なり。晴るる毎に紅茶を飲みて与に談ず。或る時一書異界より到る。曰く『折楊柳』。館主未だ鳥跡を読むを得ず。故に余之を読みて解す。館主欣然たり。其の後館主、屢しば図書館を訪ふ。古籍を読み、屢しば余に問ふ。余読書を酷愛す、以て悦びてこれに答ふ。

而る後蓋し得る所有るならん、一詩を賦して余に示し、余これを裁す。館主再び示し、余再び裁す。終に好詩を為るに至る。是を以て与に山界曲湾に遊び、風韻縷しば相ひ娛しむ。互ひに詩を賦し頻りに応酬す。爾後館主余に草稿を示し、其の序を属す。余喜びてこれを識す。亦た楽しからずや。——知泉姫帕莉、之を識す。

さすがは知泉先生、いい文章だと思うわ」

姫帕莉は私の名前を中国風にもじったもの、それに知泉は自分の名前から取った私の雅号。それにしてもレミリアったら、白文を一気に読み上げた。いつのまにこんなことまで。少しおどろく。

「お褒めにあずかって光栄ね」

「あら、遠慮がちね。だつてそうでしょ？ 『遠方朋有り、近人亦た然り』なんて、『論語』の『朋、遠方より来たる有り、亦た樂しからずや』をひっくり返して、『遠方から友だちが来たらほんとうに楽しい、それは孔子の昔からみな知っていることだ。けれど私には、近くにも友だちがいるのだ』って言っているわけでしょう？ さすがの表現じゃない。それにその『朋』は私。嬉しくないわけがないじゃない」

「そう言ってくれると嬉しいわね」

「でしよう？ でしよう？ それにそもそもパチエがいなかったらこの本はできなかったんだから。だからパチエに贈った詩を最初に載せたのよ。ほら、これ」

そう言ってレミリアが指さしたのはつぎの一首。

贈姫知泉詩

姫知泉に贈るの詩

夙識書中好友存

夙に識る 書中 好友の存せるを

已知君子掩柴門

已知る 君子 柴門を掩へるを

敢言窗外百花景

敢へて言はん 窗外 百花の景

非女此情誰與論

女に非ずんば 此の情 誰と与にか論ぜんや

○姫知泉：パチュリー・ノーレッジのこと。○夙識、已知：すでによく知っています。○書中好友存：『真宗皇帝勸学文』に種々読書の効能が説かれていることを踏まえる。○君子：すぐれた人物。ここではパチュリー・ノーレッジを指す。○掩柴門：柴門はそまつな柴の門。転じて学者の家の門を指す。掩はおおう。門をとぎして読書に没頭している。○非女此情誰與論：あなたでなければこの気持ちと誰とともに語りあうことができましょうか。さあ、すこし図書館を出て、私とともに楽しみませんか。

この詩が届いたときのことを私は覚えている。——私は知っています、本のなかにたくさんのお友だちがいっしょにすることを。それに知っています、あなたが門をとぎして読書に励んでいらっしやることを。けれども敢えて申します、この窓の外の美しい景色、パチ

エリー、あなたでなければだれとともに語りあうことができましょう——私は嬉しくなつて、それ以来ときどきレミリアの外出につきあうようになったものだ。

「なつかしいわね」

「あれからいろいろなところをめぐったわね。これなんて覚えてる？」

玄武澤 其二

樹根林立細流邊

樹根林立せる細流の辺

一蟹横行別有天

一蟹横行して別に天有り

水色玲瓏花數點

水色玲瓏花數點

不知塵界日陶然

塵界を知らず日に陶然

○樹根…木の根。○細流…細い川の流れ。○別有天…人間とは違う別天地があるようだ。

○玲瓏…うつくしい。○花數點…花びらが舞っている。○塵界…人間の鬱陶しい社会。○

陶然…楽しむ。

「玄武の沢に行ったときの詩ね」

「ヒカリゴケを見に行こう、って話になったのよね」

「ええ、それで歩いてそこまでいった」

「パチエったら木の根で転びそうになって」

「もう、恥ずかしいわね」

「そしたらサワガニが歩いていたのよね」

「そうだったそうだった」

「花びらが散っていて」

「まるで別世界みたいだった。その景色を詩にしたのよ！ それなのに、ねえ？」

「こうなると、でも詩だけれど、とも言えない。気持ちもわからないわけではない。言うにまかせよう——」「ええ、そうね」。

* * *

「それからこんなこともしたわよね」

七夕騷友参集、得東韻、各賦五言一句、以作五言律詩

七夕に騷友参集し、東韻を得て、各おの五言一句を賦し、以て五言律詩を作る

女牛今夕會

斯蕾莉

女・牛 今夕會し

我黨此宵同

十六夜咲夜

我が党 此の宵を同じうす

皓齒千金笑

紅美鈴

皓齒 千金の笑

紅花往昔夢

姫帕莉

紅花 往昔の夢

逍遙香世界

斯蕾莉

香世界を逍遙し

邂逅未央宮

十六夜咲夜

未央宮に邂逅す

嫌殺涼天曉

紅美鈴

嫌殺す 涼天の曉

遙望滄海東

姫帕莉

遙かに滄海の東を望む

○騷友参集：詩人たちがあつまつた。○女牛：織女と牽牛。○斯蕾莉：レミリア・スカール
レット。名前を中国風にもじつた。○我党：われわれ仲間。○皓齒：白い歯。○香世界：
花の匂いにみちた世界。○未央宮：長安にある漢の宮殿。○嫌殺：きらう。○滄海東：東

の水平線のむこう側。滄海は東の海。

これは七夕の日に紅魔館の面々で集まって、ひとつ詩を作ろうという話になったときのものだ。皆が七言の一句を作るのは少し難しいわね、では五言にしましょう、せっかくだから対句もやってみましょうよ。押韻はくじ引きで「東」韻になったので、ではやってみましょうというわけだった。

「まずは私が話をもちかけた。織姫と彦星が今宵は出逢います。そこに応じたのよね、咲夜」

「ええ、私が応じました。私たちはこの宵をともに過ごします。それで美鈴にも参加してもらって。そうしたら白い歯を見せて笑う女性を出した」

「パチエはそれに応じたのよね。でも『紅花往昔の夢』には驚いたわ」

「うふふ。たしかに対句ではあるけれど、七夕とは何の関係もなさそうなものね」

「パチユリー様はどうしてあのようになされたのですか？」

「そうねえ、ミステリアスな展開のほうがおもしろいじゃない？」

「もう、あの言葉を拾うのたいへんだっただから。とにかく私は『香世界』という言葉

を使った。で咲夜の番になった」

「正直、どうしようかと思いました。そもそも『香世界』に対応する言葉もなかなか考えつかなくて……言葉を探すために詩語集を繰ったら、三文字で対応するのが『未央宮』だったから、それにしような次第です」

「でもおかげで漢の都のイメージが入って幻想的になってきた」

「パチエの言うとおり。そこで美鈴の番だったわけだけど、『嫌殺』なんて強い言葉を出してきた。美鈴らしいと思ったわ」

「最後はこれをどうまとめるかが課題。いろいろ考えたんだけど、私は朝の恨めしさを強めて表現したいと思った。だからあんな風にしてみたのよ」

詩の内容としては、結局このようなものになったわけだ。

織姫と彦星とが会う夕べ

私たちはここに集います

白い菌は千金の笑み

赤い花は遙か昔の夢

花の世界を移ろい歩み

洛陽の都に出逢います

恨めしいのはこの朝焼け

東の彼方を見遣ります

「あれは楽しかったわね。腕前のことをいえばいろいろあるかもしれないけど、楽しいのが一番よ」

レミリアの表情が少しずつやわらいできたようだ。私も少し気持ちちが落ち着いてくる。山のほうを見遣ると、雲間から太陽が少しずつ差し込んで、とても美しい。

* * *

「それから咲夜にも作ってもらった」

「あときは楽しかったわね」

「いえ、正直いって緊張しました……」

紅魔館前之遊

十六夜咲夜

春陰茗氣送餘香

春陰 茗氣余香を送り

添得詩情湖上亭

詩情を添へ得たり 湖上の亭

閑酌黄昏孤館暮

閑に酌す 黄昏孤館の暮

淋鈴雨脚濕階庭

淋鈴たる雨脚 階庭を潤はす

知泉子曰、庭前景如在眼前、惜添得詩情之字、是意難通也。亦黄昏與暮之字、是同義也。宜改也。

（知泉子曰く「庭前の景、眼前に在る如し。惜しむらくは『添得詩情』の字、是れ意通じがたし。亦た『黄昏』と『暮』との字、是れ同義也。宜しく改むるべきなり」

斯氏曰、雖閑酌之二字亦可怪、詩情馥郁、佳哉、有謬而後有學、呵呵。

（斯氏曰く「『閑酌』の二字亦た怪しむ可しと雖も、詩情馥郁たり。佳きかな。謬り有りて後ち学ぶ有り。呵呵」

○春陰…はるぐもり。○茗氣…茶の気配。○閑酌…しずかに酌む。○黄昏…たそがれ。○淋鈴…あまおと。○階庭…にわのきざはし。○知泉子…パチュリー・ノーレッジのこと。子は敬称。○意難通…意味が通じにくい。○同義…重複。○宜改也…改めるのがよい。○

斯氏：レミリア・スカーレットのこと。○馥郁：香り立つ。○呵呵：笑い声。あつはつは。

「私たちのコメントはもう書き入れてあるわね。咲夜、どう思った？」

「そうですね……ちよつと恥ずかしかったです」

初めて作ったときは、このまま笑いものになるんじゃないかと思つて、なんだか恥ずかしい気持ちになるものだ。咲夜もそうだったのだろう。私が言うことはひとつ、「そう言わずに何かおっしゃつてごらんなさい？」

「そうですね……まず、全体は今日のような光景を考えて作りました。だから茗気は紅茶の香りです。それより、『詩情を添へ得たり』のところ少し気になりました。あれではいけませんか？」

「まあ微妙なところなんだけどね……」。私が言い淀むのは、「添二得詩情一湖上亭」は、上四文字が下三文字とすぐには結びつかず、詩の表現として少し無理があるのではないかと思うからだ。あわせて「添得」を用いた作例をいくつか挙げてみよう。すると――

只應添得清宵夢 只だ応に添へ得たり清宵の夢（唐、元稹「使東川嘉陵江二首其二」）

一聲添得一莖絲 一声添得たり一莖の糸（唐、白居易「聞夜砧」）

添得臨岐淚滿巾 岐れに臨みて涙滿巾に添へ得たり（唐、羅隱「東歸」）

添得五湖多少恨 五湖に多少の恨を添へ得たり（唐、溫庭筠「河中陪帥遊亭」）

添得罇前一日春 添へ得たり罇前一日の春（宋、呂陶「寄花廣漢守倅」）

どれも「添得詩情湖上亭」とはなっていないのである。やはり「詩情を添へ得たり 湖上の亭」は少し無理があると思う。もし詩の例があればそれでよいから、ご存知の向きがあれば教えてもらいたいものだ。

「それから、『閑に酌す』がよくないというのも気になりました」

「それも微妙なところなのよね。たしかに咲夜は『閑に酌』しているのよ。けれど、『閑』が似合うのは役目から解放されている人で、少しでも緊張している人ではないと思う。だから咲夜が紅茶を淹れている光景には少し合わないと思うのよね。そうねえ、『徐ろに』とか……」

「まあまあパチエ、いいじゃないの。だって感じが出てるじゃない？ それにほとんど初めて作ったわけでしょ？ だから楽しめばいいのよ」

レミリアが笑った。

* * *

「それからこれこれ。せつかくだから入れたのよ」

レミリアが指さしたのは、咲夜と森近霖之助との和歌の贈答。

たはむれくさ 相聞八首

ながらへば君の姿のしのばれぬ藻塩焦がれて袖はぬれつつ

十六夜咲夜

船乗りの見ずや難波のみをつくし逢はでながらふ身にはあらねば

森近霖之助

難波潟大海原に漕ぎ出でて潮に忘るや咲く花の香を

咲

太宰府に行き交ふ都の梅が香を難波の人のいかで忘れん

霖

忘れずば難波の潟の浜千鳥人の心を伝へ聞かせよ

咲

難波潟咲くやこの花別れては過ぐすよしなし千鳥伝へよ

霖

咲く花のさかりはよしや過ぎずともとく帰りこよながめせしまに

咲

ながめてむあしの間に間に過ぐしては花移りけり今帰りこむ

霖

「レミイ、これ、相当ひねってあるわよね。私、初めて読んだとき驚いちゃった」

「ええパチエ。難波湯のイメージをフル活用って感じよね」

「ちよつと二人でやってみましょうよ。咲夜、かまわない？」

「ええ、私がかまいませんが……」

「じゃあパチエが香霖堂の主で、私が咲夜の役。いくわよ」

「ええ、いいわよ」

レミアアのほうにすこし向き直る。レミアアもすこし襟を正す。咲夜は私たちをじつと見つめる――

「ずっと過ごしていますと、君の姿が偲べれます。明石の浜の藻塩は焦がれてしまい、私の袖は涙で濡れているのですよ」

「船乗りが海に出るときに難波の滯標に頼らないなんてことはないよね。おなじことさ、僕は君に逢わずにはいられないんだから」

「よくおっしゃい。どうせ大海原に出てしまえば潮の匂いに紛れて花の匂いも忘れてしま

うでしょう、私のことなんてしよせんその程度と想っているくせに」

「花の匂いなら菅原道真のいる太宰府まで届くんだよ、どうして難波みたいなすぐそばにいる僕が、君のことを忘れてしまふというんだい？」

「ふうん。だったらそこにいる千鳥に気持ちを伝えて私によこしてみなさいよ」

「難波潟といえは咲くやこの花、花のような君と別れてしまつては生きていく甲斐もないよ、さあ千鳥よ伝えておくれ」

「あらそう。なら……分かつていると思うけれど、盛りが過ぎてしまふまでずっとほったらかしにはしないでしようね。わたしが待っているあいだに帰つてきなさいよ」

「たしかに、ほんやりこんなところで芦を眺めているようでは、花の色も移つてしまふかもしれないね。わかつた、帰るよ」

「咲夜」

「はい、ご主人様」

「恋したの？」

「遊びです」

レミリアがいかにも残念そうな顔をした。

* * *

「あーあ、それにしてもどうしようかしら」

「原稿のこと？」

「そうよ、原稿。白紙よ、白紙」

——そうだ、いいことを思いついた。

「ねえレミリア、この話、私に引き取らせてもらえないかしら。そのかわり、今のやりとりを書かせてもらうわ」

雲が去って、空が晴れてきた。

手許には紅茶、目の前には笑顔のレミリア。

今日もまた、いつもの午後。《了》

朝の街角にて

運動というものにとんと縁がないが、散歩ばかりは別である。

しばらく前に、たまには運動もしろと世話になつてゐる薬師が言うので、数世代に渡つて鈍りを極めた私の体でも、散歩くらいならできらうと始めてみた。

のんびりと足を動かすのは、溜まりに溜まつた幻想郷縁起の草稿やら、毎日のように催促が来る新聞のコラムやらで、凝り固まつた頭と体を解すにちようど良かった。そんな望外の効用もあつてか、今日まで散歩の習慣は続いている。

これといった散策路を決めずに幻想郷のあちこちを歩きまわっていると、ふと印象的な景色に出会うことも少なくない。また、一度通つた道でもその時刻、季節によつて顔が違ふのが何とも面白い。

例えば、それは四季折々に衣を変える山の参道であつたり、あるいは日が昇るに連れて朝霧が開けていく湖畔の道だつたりする。

もちろんそれらは素晴らしい光景ではあるのだけれど、私がより心を惹かれるのは人里の街角だつた。街ほど時間によつて顔が変わる場所もそう無いだろう。

それを実感したのはつい先日のこと、その日は私にしては珍しく日の出前に目を覚ました。せっかく早くに起きたのだから編纂の続きでもと思つたが、いまいち頭が働かない。

かといって二度寝をするのもなんとなく勿体ないので、眠気覚ましに里を歩いてみることにした。

思い起こしてみると、いままで朝に外出することはまったくなかった。出かける用事といたら小鈴や慧音のところに資料を借りに行ったり、インタビューに出向いたり程度。おまけに職場は自宅の自室。これでは朝から外に出る理由があるはずもない。

寝間着から着替えて、家人を起こさないようにこっそりと屋敷を抜けた。

夜明け前の空は黒とも紺ともつかないような深い青を湛えていて、山の端だけが辛うじて白んでいた。星明かりのお陰だろうか、それでも周りは不思議とよく見えた。

どこへ向かおうかしばらく迷って、目抜き通りの方へ向かうことにした。吐き出す息は微かに白く、深く息を吸い込むと冷たく澄んだ空気がじわりと胸に広がった。暦が春になって久しいけれど、まだこの時間には冬が残っているようだ。襟巻きでもしてくれば良かったか。

まだ明かりの灯っていない家々、朝露に濡れた野菜や果物の畑。水路には渡し守も乗客もない渡し船が杭に結わえられて静かに浮かんでいた。それらは群青の朝に沈んで、ひっそりと夜明けを待っていた。

どこかピンと張り詰めた空気に、自分の足音だけがざくり、ざくりと響いている。ここには私しかいないという錯覚。この静かな街を独り占めしているようで気分が良かった。

出自もあつてか、あまり街をふらふらとしていると注目を集めてしまう。九代も生まれ変われば、浴びせられる視線にも慣れてはくる。しかし稗田の者が用もなく頻繁に出歩いているとなるとあらぬ噂も立つだろうし、当代の阿礼乙女は怠け者だと思われても心外だ。自ら選んで引き受けた役目ではあるけれど、なんとも息苦しい話だ。

昔とは時代も変わつて来ているのだから、やはり里との付き合いも改めていくべきだろう。次の自分のためにも、こうして好きな時間に気軽に里を出歩けるようにしたいものだ。もうずいぶんと歩いた気がするが、目抜き通りまではまだ少しばかりある。遠くに見える山の端は、先ほどよりも明るくなつてきている。白と橙の明かりが、夜の帳を押し上げているようにも見えた。通りにつく頃には日の出が見えるだろうか。

気持ちばかりに歩みを速くした。しばらく歩いて水路に架けられた橋を渡ると、人家は段々と少なくなつて代わりに商店が増え、目抜き通りに合流する。

橋のたもとには簡単な船着場があり、その向かい側には魚屋が店を構えている。献立に魚を求めることの多い私はよくお世話になっている店だ。いつもは威勢のいい掛け声が聞

こえる店先も、この時間はまだ静かだ。開店している時には新鮮な川魚や干物を並べている台の影に、子連れの猫が座っていた。三毛の親子はこちらには目もくれず店の奥を見つめている。きつと彼女たちは魚屋の起きる時間を知っていて、下拵えで出た売り物にならない魚の切り端なんか捨てられるのを待っているのだろう。

首の後ろを撫でながら「おはようございます」と話しかけてみると、一度ばかり「にゃお」と短く鳴いてそれっきりだった。苦笑いをしながら魚屋を離れた。

道沿いには商店が雑然と並んでいて、人がいればいかにも賑々しくなるだろうと分かる。しかし、今ほどの店も戸を閉めてひっそりと静まり返っている。通りのあちこちに店の看板や休憩用の椅子が並んでいるのが人気の無さを際立たせているように思われた。

人っ子一人居ない、がらんどうのような街の中心で佇んでいると、わけもなく胸が踊るような気持ちになる。知っているようで、知らない街がそこはあった。

人がいるのといかないのでは、ここまで印象が変わるものなのかと一人感心しながら、店員も客もいない店々を冷やかすように見て回った。

定食屋の入り口に掛けられた一世代前から変わらないメニューを見て、今日のお昼は洋食がいいなと思ひ、八百屋の使い古された台が少し斜めになっていて通りからも見やすく

なっているのに気付いてへエと感心した。普段立ち入ることのない外来の品を扱う店や洋装品店の前を通ると、陳列窓は綺麗に磨き上げられていて、中でうやうやしく飾られている商品は歩きながらも見やすいように配置されているようだ。

馴染みの茶屋の前まで行くと、出廻らしの茶葉が入った袋が店先においてあり、『ご自由にお取りください。掃除や臭い除けにどうぞ』と店主の添え書きがしてあった。

早朝の街角がわくわくするのは、言ってみれば昔の遺跡や博物学の本を眺める時の心持ちのようなもので、普段は触れ得ないものに触れられるからなのかもしれない。

物珍しくて、あちらへこちらへと物を眺めていると、視界に端にさっと光が差した。山の方を見やると太陽が顔を出していて、藍色の夜は光に溶かされるように消えていった。山や建物の縁に橙の明かりが差したと思うと、次の瞬間には空は刷毛でひと塗り塗ったように青く転じていた。

見れば銭湯の大煙突から白い煙が立ち始めていた。釜に火が入ったのだ。その煙を合図に、街が俄に起き始めた。

惣菜屋からは軽快な包丁の音とともに何かを炒めるような香ばしい匂いが漂ってきた。八百屋が大籠を背負って、次はあの家にかぼちゃを四つ、その次は某の居酒屋に山菜と山

葵を、とぶつぶつと呟きながら配達に向かっていた。新聞をぎっしりと籠に詰めた自転車が通りを右へ左へと立ち寄って、新聞を投げ入れていく。欠伸をしながら箒で店先を掃いている子供もいる。

徐々に商売人以外にも仕事道具を持った男たちに、朝市に向かうらしい女性が道に溢れてきた。もう少し時間が経てば寺子屋に向かう子供や、別の里からやってくる行商人もやってくるだろう。

がらんどうのような街の、壁一つ隔てた向こう側にはこんなにも多くの人が居たのだと思うと、当たり前のことのようだが何故か不思議な気分になる。

そろそろ帰らねば家人が起きる時間だ。私を起こしにきた小間使いに無用な心配を掛けたくない。

屋敷への道に戻る前に、もう一度街の方を振り返った。人のいる街は、やはりどうにも先ほどまでと違って思われる。夜に訪れたらまた違った表情が見られるのだろうか。

カメラを持って街角の記録でも残したら面白いかもしれない。文さんはたてさんに頼めば、手に入りそうだ。今度新聞を持ってきた時に聞いてみよう。

この考えは大変愉快なものだったので、是非実行したい。もしかしたら幻想郷縁起に新しいページが追加できるかもしれない。

そんな皮算用をしながら、朝の街角をあとにした。《了》

彼女の事

私の友人「藤原妹紅」という人間については、いかんせん胸に思うことが多くあるので、ここに書き記すとする。久方ぶりに私用の筆を執る為、いかんせん散文するが誰に見せるわけでもあるまいし、いいだろう。それに今、彼女が台所に立っている。包丁の音を聞きながら、手を動かすというのはつかいのいない私には珍しい事なのだ。飯が出来上がるまでの暇つぶしとして書いて行こうと思う。

さて今一度、我が友人の出自を整理すると千三百年前の藤原家だ。貴族の家の娘としてこの世に生まれ落ちたのだが、今や見る影もない。因縁の輝夜姫とは血で血を争う喧嘩をしているし、やめろと言っても聞かない。そればかりか「今度は勝って見せる」と私に言い放ちながら、私の作った飯を勢いよくかつ喰らうのだ。そんなわけで我が友人に貴族としての面影はもう残ってはいない。それに私はそういう事を友人に期待していない。本人に一度、そういう作法を試してみてもどうかと尋ねたことがある。すると帰ってきたのは「煩わしい」の一言だ。それを聞いては諦めるしかない。彼女は頑固者だからな。

そんな事だから、彼女の方が年上だという事を忘れてしまう。彼女は曲がりなりにも私よりも年上だ。だが、その振る舞いはどうにも見た目の年相応に思えてしまう。だがそんな振る舞いだからこそ助かっていることもある。彼女は、よく教室にいる生徒たちの面倒

を見てくれている。喧嘩があれば両者の話を聞き入れ、どちらを責めるでもなく、ちゃんと言話を聞いて両者を諭すのだ。本来ならば私がやらねばならない事なのだが、彼女は自分から率先して面倒を見てくれる。教師の立場からでしか物を言えない私に対して、彼女は生徒らに寄り添った立場から物を言ってくれる。これほど助かることはない。私が言うかどうかどうしても鼻肩してしまっているように見えるのでな。

出会った頃は荒れかけていたものだが、今は随分と穏やかに成っているのを見ると彼女もだいぶ落ち着いてきたようだ。人里では里民との交流もしているし、信頼も厚い。私が居なくなつた後でも彼女は恐らくやって行けるだろう。彼女には人里の守護者を継いでもらえないだろうかと思う事がある。私からの推薦ということならば周りは納得するだろうし、特に実力も人格も問題ないはずだ。まあ喧嘩っ早いところがあつたりするのが傷だが、私も頭が固いのでそこは相打ちという奴だろう。

あとは永遠亭との付き合い方をうまくやってほしい所だ。それだけが私の悩みだが、この話は長くなりそうだからまた今度の機会に締めるとしよう。

万年筆を置き、軽く伸びをして手帳を閉じる。

台所からは、味噌を焼く匂いが私の鼻腔をくすぐり、空腹を刺激し始めている。彼女の

作る飯は素っ気ない物だが、私の舌に合う。

ああ、今日は何を作ってくれているのだろうか。

私は、心地よい匂いに釣られるままに台所へ行く。

誰かと食べる飯は久々だ。また彼女と話しながら手帳のページを肥やすネタでもかき集めるとしよう。

彼女の時間は無限だが、私の時間は有限だ。

私が死ぬまでに彼女の事で何冊の手帳を埋めることになるだろうかと思うが、それは死ぬ間際の楽しみとしよう。そして彼女がそれを読んでいる姿を観賞したいものだ。

そんな意地悪な楽しみがあつていいじゃないか。

彼女は年上なんだし、多少年下のわがままは聞くべきだろう？ 《了》

朝夕三昧

左は、九代目阿礼乙女、稗田阿求の著述せしもの。

此の節の出来事を逐次に纏め、日々の周縁を綴りせしものである。

一、些細な虫のこと

いつの頃からか、庭に妙な虫が棲み着くようになった。先んじて樟脳を撒いておいたのに古い松や楓の虚、卯の花の上などに見つけ、その度に摘んでは塀の外へと投げていた。白地に細かい黒の斑を持つ虫で、頭に細い鬚を揺らして、大きいものは小指ほどの、小さいものはあけびの種ほどのものがちらちらと目に入った。なにを害するわけでもなく呆けるようにしているので、捕まえるのは難儀ではなかったが、少しばかり数が多く、なにより可愛らしくない。散々投げてはみたもののこちらが根負けし、いまは放っておいた。ただ庭の草木を食するようならばなにかしら講じなければならぬ。毎日の検分を怠らないよう、用心しなければならぬ。

こうした妙な虫、見慣れぬ鳥などは危難を予兆し、こちらへと語りかけてくるものである。困り込んだ庭であるから、とみに外からのものには弱い気質があつて、少しでも変化があれば途端に悪い方へと転がることがある。見知らぬ虫はその訪れを誘うものであることが多いとすれば、やはり放っておけるものではあるまい。虫の知らせとはよく言ったものだ。緑の色を気にしつつ、もう一月だけ様子を見るものとする。

一番の鼻屑である蠟梅の根本からひこばえが生えてきている。これもあまり多くなると樹勢を弱めるので、取る。水やり少なめに。敷いた玉砂利の補充早めに。庭師への申し伝えも早めに。女中にも言つてやり逃すことなきよう。

午後になって、家の猫が帰ってくるのと同時に、昼八つの鐘が鳴った。それが妙に愉快だったので褒めてやろうと猫を呼んだのに、知らんふりを決められた。呼んだ私の手が泳いでいるところをちょうど通りかかった女中に見られ、今度は私が知らんふりをする羽目になる。だのに勘違いしたのか、しずつと寄ってくるものだから、梁の上が汚れていたとぞんざいに言つて下がらせた。梁など年中を埃で汚しているので虚言ではあるまい。しかしちゃんとそれを目にしてから言つたわけではないので、わざわざ踏み台を用意して梁の上を見定める羽目にもなった。その上、そうして梁がちゃんと汚れていたのに安心してゐる自分に閉口してしまふ。時折、どこからやり直せばこうならなかったのか、などと、詮ないことを考える。女中には、梁の掃除は年末でよい、と言つておいた。

縁側で涼みながらお茶を飲んでみると、急にどら焼きが食べたくなって、飲みかけのままに勝手に行く。下女中がちょうど居らず、ひとり棚を探してみるも一向に見つからない。自分で仕舞ったのではないから当たり前であろう。勝手などあまり立ち入らないので、鍋や皿などどこにあるのかさえ見当もつかない。やっと見つけたのは少し固くなったお団子。流石に手は出さずにその時分は我慢することにした。縁側へ戻る途中ですれ違った下女中に、お団子ももつたいないから早く食べてしまいなさいと言うと、頭を上げ下げされて頼りに謝られる。どうやらあれはその下女中が隠しておいた残り物らしい。誰にも見つからないのをいいことに、こっそり食べていた、と。残り物なんだからいいよと不問に付しておく。よく勝手を知っているであろう他の下女中には見つからずとも、ただ偶然居合わせた、勝手のなにかもをまったく知らない私に見つかってしまうとは、なんと皮肉なものであるうか。私も、あまり女中たちの立場を乱すものではないと、反省する。

用事があったので、昼九つ前に屋敷を出て、それを済ますとすでに昼八つだった。昼餉を入られず、不貞腐れるお腹を宥めつつ帰り道を歩いていた。その道すがらに、念願で

あつたどら焼きを買いおうと、里のお菓子屋に寄る。目的はどら焼きだったが、お腹の減りもあつて他に砂糖菓子と、ごま団子を手にした。ついでにわらび餅も買う。全部が全部食べられるわけではないが、我ながら、なかなか欲が深いと想う。目に入るものすべてを食べたいとするなど、強欲甚だしい。そう想いはするが、それはそれである。手が自然と動くところに私の浅はかな思慮など及んでいるはずがなく、そこに欲や邪念などあるわけではない。謂わば悟りの境地だ。私の好きなお菓子を取ってくれる、便利な悟りである。

屋敷に戻つて自室でそのお菓子を全部広げてやった。さながらお菓子屋のようで、想わず頬も緩むというもの。端から順に一口ずつ食べていくと、寂れた私のお腹も餌を運んできた親鳥に喜ぶ元気な雛鳥のように弾んでくれる。昼餉を抜いていたので美味しさもひとしおであつた。

折角なので女中たちを呼んで、ちよつとした催しを開く。気まぐれにはあるが、たまにはお菓子を囲んで話をするのも楽しかろうと想うものだ。しかし女中どもはこれ幸いと会話もせずに食べてばかりで、果たして私の取り分は最初の一口ずつだけ、そのほとんどを啄まれてしまう。餌を取られた雛鳥の気分。もう二度と呼ばないと、そう決めた。

三、おまじないの囃り

里の童たちのあいだで興味深い遊びが花めいている。使い古した桶やお茶碗に水を満たし、砂を一掴み入れ、皆で輪になり順繰り指を差し込みながら呪文を唱えていくというものだ。入れ物はなんでもいいらしい。砂の大きさも種類も特に決まっていない。ただ、眩く呪文というものが妙ちきりんで、でんでんフマさん寝てれば済まん、とまったく脈絡のない言葉だった。こういうった遊びにありがちの、無意味だが韻を踏んだ言葉選びである。散歩の最中にその遊びの光景を見た。前述の仕草をし、呪文を童たちは口々に唱える。そこから先は、私も見聞きしたことのない光景だった。

ひとりの童が、三食ぜんぶがお菓子になって欲しい、みたいなことを言った。その隣にしゃがむ童も、お父がやさしくなるように、お母もやさしくなるように、などと欲張りなことを言う。次の童もやはり某になりたいと眩いている。願い事を言っているのだ。遊びだと想っていたのは、どうやら願いを叶えてくれるものになっていくらしかった。

最初は本当に単なる遊びだったのだろう。しかしそれが童たちのあいだで広まるうちにだんだんと意味合いが変化し、願い事が叶う、おまじないになったのだ。

こういったおまじないの類は、時折里で流行するものだ。以前は下駄の鼻緒に花を挟み込んで、意中の相手がそれに気づくと両想いになれるとか、食べ合わせでも、何故かお餅と柿と一緒に食べると身体に悪いとか、よくよく考えると謂われもなにも無いようなものが流行していた。不思議と、熱するのも冷めるのも早いので廃れてしまうと誰もが一樣に忘れてしまつて、一年後には憶えている者すら少ないのが、やはり流行という渡り鳥の定めなのだろう。たとえそれが悪い意味合いの流行だったとしても、立つ鳥跡を濁さず、綺麗さっぱり忘れ去られるのがいじらしい。されどこの渡り鳥は、何処から来て何処へゆくのか、まったく判然としないのだが。

その渡り鳥が、我が稗田家にも来訪して足跡を残していった。女中たちが件の呪文を唱えているのを風呂場近くの廊下で立ち聞きしたのだ。でんでんフマさん寝てれば済まん。改めて耳に残る呪文だ、と感じ、はてこの「フマさん」とは一体誰のことどこから導きだされてきたのだろうかとも不思議に想う。自室に戻って暫く思案に耽っていたが、庭からキビタキの美しい囀りが聞こえてきて我に返る。襖を静かに開けて外を覗くと、楓の枝の

上で、鮮やかで夕陽のような黄色の羽毛を膨らませている様子が目に入った。渡りの途中で道草でも食っているのだろうか、密かに独り言つ。

四、お布団と雀

お布団を干した。朝から降りそうで降らない重苦しげな雲であったが、暇潰しに飴玉を口で転がしながら見上げていると、暫くして遠くから陽の光が広がり、あつという間に蜘蛛の子を散らすように灰雲が逃げて行つた。いや、お天道さまに照らされて口中の飴玉のように溶けていった、という方が似つかわしかろう。灰色が溶けた後はしかし、澄み切つた青い空であるのだから不思議である。その空の下で干したお布団は、青色が染み込んだかのように芳しい匂いと、お天道さまが暖かい手で撫でてくれたかのような温もりを宿すに至つた。なので干し竿から降ろしたお布団を抱きかかえると、まるで青空を胸元に引き寄せたようで、そのまま縁側に飛び込んでしまえば、身体中が柔らかさに包まれて雲の上

に寝転がっているようだった。日差しは明るさと暖かさ、吹き抜ける軽やかな風、そして背中にお布団の優しさを感じていると、空に浮かんで沖融たる気持ちになる。すると眠気が降りてくるのも致し方なからう。私は、眠気に身を任せてしまつて、寝てしまおうと想つた。

どれほど眠っていたのか分からないが、ふと眠りから覚める。眼を開けてもまだうつらとした眠気が残っていたので再び閉じようとする、私の頭の近くに小鳥が居るのに気づいた。どうやら雀のようである。私が寝ていて、あんまり動かないものだから、警戒もせず寄つて来たのである。これでも寝相の良さには自信がある。雀が可愛らしく跳ねているのを眺めながら、麗らかだと感じていると、急に眠気も薄まる事態になる。

雀が鳴き出したのだ。しかしそれは普段朝方に聞くような小さく節操のある鳴き声ではなく、低い声で、然らば、然らば、と囀っている。雀の小柄な身体からは似つかわしくないう声、さらに小さい嘴を通して寝ている私の耳に届いてくるのだ。それにしても、そんなものが頭の近くに居ると、奇妙であると共に、なんだか寂しく想つてしまう。然らば、などとまるで別れの挨拶ではないか。その鳴き方からして、他の普通の雀の仲間たちから疎ましく扱われていたに違いない。可愛らしい姿なのに、気苦労が多いのかもしれない。

やがて雀はもう一度だけ、然らば、と鳴いて青い空へと飛び去っていった。私はその時に、雀の身体に虫が付いていたのを見逃さなかった。白地に細かい黒の斑を持つ、あの虫である。さてはあの雀が意図せずとも虫を運んできていたのか、それとも、虫をこの庭から運んでいったのか。どちらかは判然としないが、一先ず私は身体を横にしたまま、青空に向かつて、然らば、と眩いておいた。

五、夢と空ろ路

毎晩ほとんど同じ時刻に寝に入るが、同じ内容の夢は二度と見ることがない。いつも違う夢なのだ。先日は、屋根の上を歩くという夢を見た。延々と瓦の尾根が続き、そこを私は足袋だけを履いたまま、あてどなく、意味もなく歩いているのだ。一步踏み出すたびに瓦が音を立てるのだが、進んでいると時折水溜りに足を踏み入れるような水っぽい音を出す瓦があつて、それだけ鈍色でなく、青い。しかし私が踏んで通り過ぎたあとに振り返っ

てみると、その瓦は何故か忽然となくなり、代わりに西瓜が置いてある。いや、西瓜が胡座をかいていた。普段見ている普通の西瓜に、腕と脚が生えており、足はぎゅっと堅苦しく胡座をかいて、両手はまるで拝むかのように合掌、なにやら神々しくしている。その光景はどう考えてもおかしいことなのに、夢の中の私はそれが至極当然として、むしろ精神統一しているらしいから邪魔をしてはいけないという気になって、また前を向き屋根を歩き始めようとす。そしてこれが夢だとは露知らずに普通の事として受け止めるのを、どこかおかしく想っている私も、いる。だがその私は姿を現さず、懐疑心の意識だけが場の空気に溶け込んでいるような、不思議な感覚。主観と客観が入り混じっているのが大いに夢らしい。そうして再び屋根の上を歩いて行くのだが、いつの間にかやら屋根の縁の、落ちそうになるほど端っこを進んでいて、片手を瓦に触れさせながら恐る恐る歩いていた。屋根の下を覗き見ると、また別の屋根が見えた。ただ、下の屋根の瓦はよく見ると動いている。それは細く長い、蛇のような生き物の背中が屋根になっっているらしく、なるほど瓦が鱗で、その長い身体を蠢かせるたびに鈍色の硬い鱗もざわざわと脈打っているのだ。頭と尻尾が見定められないので、恐ろしく長い生き物なのであろう。そう言えば遠くから雄鶏が喧嘩をする際に啼くような耳をつんざく声が聞こえていたので、あれがきつとこの生き

物の啼き声なのだ。ふと、私が歩いてきたこちらの屋根も同じ生き物なのであろうかと、ちようど触れていた瓦を一枚、力づくで捲り上げてやった。生き物であればその痕跡が、ただの屋根であれば貼り付けた木板があるだろうと想ったのである。結果からすれば瓦の下にはまた瓦があった。その下にもまだ瓦があつて、さらに捲つても瓦が続く。ああこれはただの屋根でもあの生き物でもないのだな、と感慨深く想つたところで、目が覚めた。すでにお日様は高々と天に御座す。寝間着のままではおつと空を眺めていたら、今日は用事のある日だと女中が慌てて告げに来た。私は、知つてる、と返して部屋の中に戻り障子を閉めた。

六、問屋三昧

我が稗田家では薪木は薪屋から買う。里に薪屋の本店があるので、そこから定期的に、若しくは稀にやって来る御用聞きの小僧さんに頼んで必要な分を運び入れて貰う。その折

に、偶々見かけたので、暇でもあったし、しげしげと眺めることにした。力仕事に長けた店の男衆が着物の袖と裾を襷で纏め、掛け声と共に大八車から薪木を降ろしている様子は、さながら祭のようである。その賑わいだけでも、それなりに暇は潰せたように思う。

屋敷の勝手の裏に運び終えた薪木の山に、一本、白いものが混じっていた。顔を近づけて納得。薪木が白いのではなく、薪木に蟻螂の卵が付いていたのだ。これは付いたままでもいいのかと、薪屋の番頭さんに聞けば、縁起が宜しいから先方様の邪魔でなければ付けたままにしているらしい。そのうちに孵るだろうということだろうか。女中に、孵るまでは間違っても火にくべてはいけない、と言を強めに申しつけておいた。

他に屋敷へ出入りしている業者には、反物問屋や油問屋、酒問屋等がある。夏場には氷屋も呼ぶ。冬場には炭問屋の色黒で丸っこい顔が、引っこ切り無しに屋敷の門を出たり入ったりしている。様々な立場の者が出入りする屋敷であるが、その人々に混じって野良猫も出入りしているのに先日気づいた。左の後ろ足にだけ黒と茶の斑模様がある白猫で、店の大八車が行き交う合間を縫うようにして、屋敷の門から、行儀良く入ってくるのだ。

白猫はうちで飼っている猫と顔を付き合わせながら挨拶をし、暫く一緒になって日向ぼっこをしたのちに、私や、家の者と女中数人、最後に下男へ挨拶するとまた門をくぐって

出て行くので、いつの間にかやら内々で問屋猫と呼ばれるようになった。毎日決まった時分に訪れ、その素行からしてまるで御用聞きのようなだとなったからである。

野良猫に名前を付けるのは至極まともな遊びだと想うが、その猫に仕事まで与えた気になつてしまふのでは話は別だ。これでは野良猫の野良猫たる性分に関わるのではないであろうか。幾らか私としても人としての気概に欠けるのではなからうか、とし、今日来たときに餌を与えてみた。せめてもの褒美にと気を遣つてみたものの、しかし問屋猫は何故か餌に口をつけない。こやつ、並々ならぬ矜持をその小さな身体に宿しているらしい。

ならばと私も問屋猫と一緒に屋敷をぐるり、挨拶回りをした。恥ずべき行いをした戒めと、問屋猫殿への陳謝も含めて、である。挨拶を終え、問屋猫殿はもちろん門をくぐつて出て行くので、私も同行しようとしたところで、女中頭に見咎められた。大事な御用があるはずだと。大いに、残念であった。

七、鈍くて鋭い

他の物事に一瞥もせず書き物をしていると、視界が狭くなっているぶん、他の四感が妙に鋭くなるようで、ちよつとした物音が気になるし、鼻に触れてくる空気にも集中を削がれるし、終いには誰も触れていないのに肩や背中に熱を感じて、そこで筆が止まってしまふ。それは決して私が散漫なのではない。先日もはたとすると手首を小さな蜘蛛が這っていた。重さも些細な上に、そうして気づいてからだとして触れているかどうかさえ判断しかねるその渺々なる足運びを、私はしっかりと感じ取れたのであるから、鈍いということなどあるわけがない。きつとそうである。

逆に、物事に対して鈍くなるのはどんなときかと、考えを巡らしてみた。例えば寝ているときなど、これは大体が気を失っているわけなので、なにかを知れるはずがない。眠りが深ければ雷様が轟いていようと起きることもなくずっと寝ていて、起きてから誰かに言われてやつとそんなことがあったと知るほどである。寝ているときは鈍いどころの話ではないのであろう。鈍いのではなく、そもそもが自分に届いていないのだ。

他に、ぼおつとしているときなど、これこそ散漫であるし、お茶を飲んで日向ぼっこをするときはむしろ散漫であるほど気が休まるので、大いに鈍くする。自らの心をお餅のよ

うに柔らかくすることで精神に憩いを設けるのだ。このようなときにはやはり何事にも気づけない。誰かに名前を呼ばれたとしてもすぐ傍で肩を叩かれるまで分からないし、自分で持っていながらお茶を飲み終えたことさえ分からず、口を付けても唇に熱さを感じられなくて、不思議に想い湯呑みを覗き込んでから初めて驚く始末。そうして時の流れの早さにも鈍感になるので、さつき夕餉を食べたと想っていたのに気がつけば夜半を過ぎていたりする。一日を無下にしてしまった後悔は否めない。

鈍感というのは罪だ。いや、罪とは至らずとも救い難い行いだと少なからず想う。

一端に鋭敏に捉えていることがあるすぐ傍で、もっと大事で、もっと気づかなければいけないことがある。物事に関して、鈍くあるべきことと鋭くあるべきことがあって、時折その鈍くてもいいことが知覚をやはり鈍くし、知らなければならぬことを隠してしまう。わたしはそれをやってしまうことがある。幾度ともなく転ばぬ先の杖があればと想ったことだろう。後悔なんてもう二度としたくないと誓いつつ、教え切れない鈍感をしてしまう。私に限ってしまったえばそれらを忘れられないことが、果たして悪いことなのか良きことなのか。評価は私自身ではなく、周囲のひとにしてもらおうというのが、私見である。

八、一夜のこと

一通り、一日の仕事が終わって寝入る準備をしていると、私の寝所に女中が入ってきた。寝間着を持つてくる為と、お布団を敷いてもらう為である。女中には他にも、寝付きが良くなるよう香を焚いてもらったり、お風呂あがりに髪を梳いてもらったりも、する。横になる前にお茶や、小腹が空いていれば夜食も頼んだり、指先が気になれば爪研ぎも、起き抜けに白湯なども用意してくれる。兎に角、言伝てしておけば大方のことをしてくれるのが、主人に仕える上で然るべき女中というものである。

その女中が、私の傍に腰を下ろして寝間着を置くと、目配せをしてくる。もう床に就きますか、と言葉も要らずに目だけで尋ねてきたのだ。それは決して無作法なことではなく、私と女中たちとの信頼を現していると言っているに過ぎない。それなりの時間を共に過ごしているのだから、当然である。同じくらいの苦勞をかけている気もしているが。女中から送られた親しげな目配せに、私も慣れた気持ちで返事を返した。もう少し起きていたい。私

の首振りを認めたのか、女中は少しだけ咎めるような目つきをするが、すぐに、分かりましたとばかりにため息をし、部屋を出て行こうとする。喉が渴いてお茶が欲しくなったのだから、仕方がない。いそいそとする女中の背中に、おっと、お茶を頼もうと声をかける寸前、私は耳を疑った。然らば。部屋から出て行く女中が、確かにそう言ったのだ。

驚きと呆気のせいで、ついそのまま見送ってしまった。どうしたことか、以前の雀の鳴き声のように、やはり低い声であった。元々のその女中の声はもつと高かったはずで、例え出そうと想つても出せるような声ではなかった。偶然そのようなことを言ったのか、偶々、そう言いたかったのかもしれない、として、私は問い質そうと女中を追って部屋を急いで出た。

部屋を出てすぐ、火が灯っていない燭台に躓いた。私が倒れた燭台を立て直している合間に女中は廊下の角を曲がってゆく。彼女の影だけが曲がり角に残って、それもまたどんな小小さく遠ざかってゆく。私は何故か呼び止めることもせず、またそれを見送る。追うにしても、足音を極力立てないように忍び足で歩いてしまう。声を掛けて、また然らば、と言われてしまうのが怖いのだ。その鳴き声をしていた雀は、この屋敷の庭から飛び立っていった。まるで何事も無かったかのように、至極当然で天然自然のように私の傍から居

なくなつてしまつた。まさかあの女中も此処から居なくなつてしまふのであろうか。あまり考えたくはない。いや、そんなことあつてはならないのだ。

結局、勝手まで追う羽目になつた。ここぞというときの小心に情けなく想う。廊下側から、勝手の中を覗くと、四人の女中が未だ仕事をしていた。再び驚いたことに、彼女らはそれぞれが口々に、然らば然らば、と喋りあつており、その上どうやら当人同士では言葉が通じているようだった。大いに奇妙、奇天烈、摩訶不思議である。漆器を片付けながら、然らば。床拭きの指示も、然らば。つまみ食いをして美味しそうに、然らば。本当に然らばしか言わず、しかし仕事は普通にこなしている。なんだか、見ているこちらの方がおかしいのではなからうかと、私も然らばと言つて混ざつてしまいたい気分になつてしまふ。

ふと、こちらに背を向けているひとりの女中の項に、なにかが付いているのを見つけた。それは雀にも付いていたもの、私が庭で見つけてそのまま放つておいたもの。白地に細かい黒の斑を持つ、あの虫であつた。あの虫が皆に然らばと言わせているのか。そして皆を外へと連れてゆくのであろうか。私が眉間に皺を寄せていると、女中のひとりが急にこちらへと近づいて来た。私は慌てて逃げて、廊下の影から女中の動向を窺う。女中は、屋敷の玄関の方へ足を向けて、なんだか辿々しく歩いてゆく。こんな夜更けになんの用かと、

やはり後ろからつけていった。女中は玄闕で草鞋も履かず、引き戸も開け放したまま外へと、そして暗い門をくぐろうとふらふら進んでいった。流石におかしいと想い、追い駆けて右腕を捕まえた。何処に行く、と、私が握る手に力を込めると、然らば、と口にする。私はそれ以上にも言えずに黙ってしまった。想像していたとおり、このまま放つておけばきつと屋敷を出て行ってしまふのだろう。出て行って、その後どうなるのか。私はあの雀の行方を知らない。私の知らないところに私の身近な者が行ってしまふのか。

意を決して、いけない、と私は言った。半分呆けているような女中をこちらに無理矢理振り向かせ、顔をつき合わせて、いけないと。私が主人なのであるから、私の言いつけ以外で出てゆくことなど許さないのだ。虫が言わせているとかそんなのは些細なこと。駄目だから、駄目なのである。

もう理非を問わずに縛り付けて、逃さないようにしてしまおうかと想った矢先、女中の襟口から例の虫が宙へと飛んだ。そして付近を少し周回して、そのまま飛んで消えてしまった。私はそれをぼおつて眺めていた。女中は気を持ち直したのか、なんだか申し訳無さそうにつまみ食いのことを謝って、無事に屋敷の中へと戻っていった。これで良かったのであるか。もうあの女中は連れて行かれることはなくなつたのだろうか。

安心してその場に座り込んでみると、今度は別の女中が、同じくふらふらとした足取りで玄関から出てきた。なんだまたか、と私が言うことやはり、然らばと言われた。もはやいい加減にしてくれと、再び、いけない、とふたり目の女中へ声を張った。するとまたも襟口から、白地に黒斑が飛んでいった。解放されたらしき女中は今度は私に、早く寝てくださいねと、小言を言つて屋敷に戻つていった。私はため息をしながらそれを見送つた。

これではつきりとした。あの虫には、いけない、という言葉が効果的らしい。私は屋敷の門前に陣取り、出ていこうとする者を片っ端から捕まえて、その言葉を浴びせかけた。十人以上いる女中に、三人の下男に、たまたま泊まりに来ていた客人に、父と母、おじじも来たがおばは来なかつた。丁稚の小僧くんが来たがなんだ、寝ぼけていただけだつた。結局朝方の、空が白んでくるまで私は門前に居座つていた。眠気眼をなんとか引き締め、その後、庭にまだ居るであろう虫を見に行く。一匹残らず、いけないと言ひ聞かせようと思つたのである。庭を一周すると夜露だらけになつたが、大方の虫を追い出せた。動きが鈍い性質だつたのは幸いであつた。一晚中起きていた身には辛いものであつたが。

今度は私がふらふら足取りで自室に戻ることになつた。枕元には、すっかり冷めてしまつたお茶が。それをぬるま湯のような安堵と一緒に飲み込むと、ずっと頭から覆いかぶ

さるようだった眠気が急に重さを増してきた。湯呑みの中に映る私に、いけない、と言いつつ聞かせるもずしつとした眠気には勝てず、お布団の中へと、沈むに至った。《了》

視線

視線というものを感じることはないだろうか。見られているという意識は、自分のことを見ている者が瞳に映っていないときであっても、不思議と生じるものだ。それは里に住む人間達であっても、私のような妖怪であっても同じであろう。

私は轆轤首だ。何も知らない者が私を見ても、まず妖怪とは気付かない。だから私は面倒なことを考えることなく人里の中で暮らせるのだ。しかし、最近里の中で視線を感じるようになった。周囲を見渡しても、視線の主は見当たらない。最初は妖怪の類いかと考えた。だが、私とて妖怪だ。妖怪の気配と人間の気配の区別ぐらいはつく。私を見ているのは人間なのだ。

確かにここは幻想郷だ。人間に見える妖怪もいるし、妖怪に見える人間もいる。動物のオスとメスを見分けるように、人間と妖怪を見分けることのできる人間だって、少ないながらもいるであろう。しかし、そんな人間は妖怪を珍しく思うだろうか。里には人間でない者もたびたびやって来る。寺子屋の教師だって、人間ではないと聞いている。迷い込んだばかりの外来人ならともかく、幻想郷で生まれ、幻想郷で育ち、幻想郷で死ぬ人間達、たびたび異変に遭遇する人間達が果たして、私のような平凡な妖怪程度で珍しがらるだろうか。私にはとてもそうは思えなかった。

視線はいつも一人分だ。私が茶屋で一服しているときなどに強く感じる。あまりいぶかしげに周囲を見回すのもどうかと思うので、気付いていないふりをしている。私が立ち上がり、露店などを回ると一緒になってついて来る。

最初の内は、少々気味悪く思ったが、慣れて来ると何でもなくなる。むしろ、肩にもう一つの頭を乗せているような、むしろがゆくも面白い気持ちになるものだ。人里に住んでいるとはいえ、私はあまり特定の店に足繁く通ったり、人間の友人を作ったりはしない。だから、こういった気持ちは私にはあまり感じたことのないものであって、言うなれば、鏡を見たら自分とは全く別の者が映っていた、そんな気分なのだ。

何かを見る者は、その見ている対象物からもまた、見られることを意識しなければならぬ。視線の主がそんなことを考えているかどうかは分からないが、私が視線を返したら、彼、または彼女は、どういう気分になるだろうか。そんなことをふと考えた。私は一度、人里の近くで暴れてしまったことがある。結局巫女に成敗されたのだが、彼女と対峙したときのことは、今でも強く覚えている。互いに強い視線を交わし合い、互いが見る者と見られる者となったのだ。視線の数は私の方が多かったのだが、彼女の視線はそれに勝るとも劣らなかった。もちろん、今感じている視線はそのときのものほど強くはない。で

も、見られているというその事実だけで、そこに意識を少なからず持つていかなければならないのだ。黒い雲が少しでも青空を侵しているなら、傘を持つていかなないと不安になるように。

私には珍しいことであるが、視線の主の気持ちを考えてみた。たまに風呂を盗み見て、厄介なことになった人間のことを聞く。そういう助平な心で見ているのか、それとも本当に物珍しさから見ているのか。私にとってはどちらでも良かった。ただ、心のどこかで、生じたことのない感情が芽生えているのだけは分かった。なぜだか自分でも分からないが、頭を飛ばしたくなった。

知らないうちに、口元が微笑みで歪んでいるのに気付いた。里を回るとき、私はいつもこんな感じだったのだろうか。一人でやけている者を見たら、確かにそこへ一時的な視線は集まるかもしれない。でも、里にいる限り恒久的に続くような気がするこの視線の主は、わざわざそんな変な奴に構わない。そんな気がした。木を隠すなら森の中とはよく言うが、私は森の中の木なのだ。木材を削る職人が、変に歪んだ木を珍しいからといって重宝しないように。

私は決して変に歪んだ木ではないと自負している。確かに轆轤首という妖怪は珍しいも

のではないかもしれない。しかし、私はその気になれば、人を驚かせる、いや、怖がらせることは、十二分にできるものだ。と心の底から信じている。だから、私はこうやって人里の中で堂々と暮らしていけるのだ。

夕暮れ時。一通り店を回り、家路につく。視線がなくなるのはいつもこのときだ。結局、今日も後ろを振り返ることはなかった。後ろを振り返った瞬間に、私の心の中に生えていく小さな小さな青い芽を、乱暴に摘み取ってしまうような気がしたからだ。私は妖怪であるから、そんな無粋な真似はしたくはない。私はやはり、この幻想郷で生きる妖怪なのだ。その事実を嘯み締めざるをえなかったとき、寂寥感がつむじ風のように心の中を通り過ぎたのだ。《了》

余暇の価値

春夏秋冬、哨戒天狗に暇と呼べるほどの余暇はないが、中でも春と秋は格別だ。氣候が穏やかで、かつ花だの果実だの山菜だのと、人が好み求めるものが次々と顔を出す季節なものだから、追ひ払う人間の数は夏や冬の倍といっても過言ではない。

ともすれば季節中休みもないこともままある仲秋の頃、私は珍しくも一日の休暇を言い渡されてしまった。こちらの心としては、この秋は休みなく哨戒するつもりだったので、拍子抜けというか寝耳に水というか、どうにも素直には喜べない。

そもそも私は、にとりからもはたてからも、休暇の過ごし方が下手だと言われてしまっている。自分のことだけを考えればその休みを使って私的に哨戒でもしていればいいのだが、休暇を与えた側の体面だとか他の哨戒天狗への重圧だとか、そうした諸々の弊害が生じることを考えると、大人しくしておくべきだろうという結論に落ち着く。

休暇を受けるにあたって、同僚に余暇の過ごし方を尋ねたこともある。一人は鯨飲馬食に散財すると答えた。一人は昼過ぎまで惰眠を貪り、起きたら寢床で書を読むと答えた。

成る程、各人に過ごし方があるものだ。そう思いつつも、私は飯も酒も量より質を貴ぶ手合いで、また休暇の日も常と変わらない時間に目覚め、二度寝もできないたちである。

書を嗜む習慣もなく、参考にはなっても影響を受けることはできそうになかった。

どうしたものと悩んでいるうちに、あてがわれた休暇を迎えてしまった。普段より少し多く酒を飲んでみたが案の定、目覚めは普段の通り。当然のごとく二度寝もできないので、仕方なしに床を出た。障子を開ければ清々しい秋晴れで、穏やかな風が頬を撫でた。二度寝はできずとも眠気は多少残っている。顔を洗って、こびりついた眠気の残滓を追い払うと、朝餉のための米を炊く。哨戒のある日は朝を冷めた握り飯で済ますので、ぬくい飯を腹一杯食えるのは休暇のいいところだろう。

蔵から出した沢庵漬けを切ろうとすると、どうにも包丁の切れ味が悪い。無理に切ってみるが、断面はがたがたと乱れていた。見れば刃が潰れかかっている。そういえば最近結構やってやれていなかったか。

どうせすることがないのなら、これを研いでやろう。鉋や小刀、それに段平などの面倒を見ていれば、持て余していた暇も埋まろうものだ。

いい考えだが、それはさておき飯にしよう。なまくらとわかっているものを使うのは億劫だが、汁物の一つくらいは拵えておきたい。

養父からの影響と私自身の気質もあって、私の宅には種類豊富な砥石がある。当然、使い分けというものがあるが、いちいち選別するのも面倒なのでまとめて引っ掴んできた。

次いで刃物をかき集める。包丁三本、鉋一本、小刀二振り、鋸三本、小太刀一振り、段平一振り。小物を除けばこれですべてだ。

たしかに一日がかりになりそうだと思いつつながら、損耗の具合を検分する。包丁一本、小刀一振り、段平一振りはとりわけ状態が悪い。中でも段平は、哨戒に出れば使わない日などない。傷み具合は顕著だった。まずはこれからだろう。

水に浸けておいた砥石を濡れ布巾の上に置き、前回研いだ時の記憶を思い出しつつ研ぎ始める。しゃあ、と鳴るやや高い音は、子供の頃から聞き慣れているため心によく馴染む。鼻で静かに呼吸。視線は砥石と刃のみを見据える。余計なものを見はしない。耳も集めるのは研磨の音のみ、鼓動さえ聞き留めはしない。

「……うん」

研ぎ上がりは申し分ない。鋭く光を弾く段平を握っていると、つい具合を確かめたくなくてしまうが、先に包丁を一本研いでしまおう。時間がかかったのか体力を使ったのか、少し腹が空いてきた。

手早く一本研ぎ終えたところで、腹の虫がぐうと鳴いた。人がいなくてよかった。苦笑にゆるんだ口から息を吐く。

ふと、ざりと土を踏み締める音と、覚えのある匂いを感じた。間違いでなければ、妖夢が普段持ち歩いている匂い袋の香り。

汗で額に貼りついた髪を払って外へ出ると、予想の通り妖夢がいて、炊事場で茶を淹れる支度をしていた。宅にいなかったり何かに没頭していたりしたら好きに使って構わないと言っているもので、特別気を害するようなことはないが、すっかり勝手知ったる炊事場という振る舞いだ。

「あ、椛さん。もういいんですか？」

「小休止だ。構いもせず悪かった」

「いえ、連絡もせずに来たのは私ですし」

差し出された風呂敷包みの中身は人里にある和菓子屋、椿寿堂の栗羊羹だった。毎度丁寧なことだ、ありがたくいただくでしょう。

妖夢との交流は、向こうから剣術の修練相手を頼まれてから始まったものだが、昨今では一介の友人として宅を訪れることが増えている。

もちろん、時間さえあれば彼女の修練にも付き合うが、春と秋は身がもたないから勘弁してくれと言つて以来、この時期に来るのは茶飲み話を求めていることだった。

友人の来訪に油断していると、また腹が鳴った。それも、先よりも大きく。

「……没頭していたんですね」

私が物事に没入すると深いことは妖夢もよく知っている。苦笑交じりにかけられた言葉に思わず頬を掻いた。

「……飯にしようと考えていたんだが、妖夢も食べていくか？」

「折角ですし、いただきます。手伝いますよ」

「助かる。ついこの間、猪を獲つたんだ。味噌漬けにしてあるから、それを一品にしよう」
「いいですね！ 去年もらった牡丹は幽々子様が気に入ってしまって、私が食べる前になくなっちゃいました……」

「……なら、今日はよく食べていくといい。土産にも一塊渡そう」

つい先ほど研いだけばかりの包丁は実によく切れた。

腹が減っている時に飯の支度に時間をかけるなど御免蒙るところだ、味噌漬けの牡丹は茸と葉物と合わせて軽く炒めることにしよう。

妖夢は私の横で手際よく煮物と金平を作っていた。健啖の主人を持つところも動きが洗練されるのかと感心してしまう。そういえば炊いていなかったと思い出した米も、気付けば妖夢が炊いている。別の時間にでもいるのだろうか。

炉端で飯を済まして、食後に水出しの煎茶と栗羊羹を出した。私自身が人里へ行くことはまずないが、妖夢が持つてくる栗羊羹は一等の気に入りである。

「近いうちに博麗神社で宴会があるのですが、柊さんもいかがですか？」

里の菓子や主人の健啖についてと、いつものような話を樂しげに話したあと、妖夢はそう切り出してきた。

「行ければ行きたいところではあるが……時期が時期だから……」

「あ、あ……そうでした。忙しいですもんね」

「そうはいつでも、無下にするには惜しい話だ。行けたら行くと、そのくらいにしておいてもらいたい」

秋の哨戒事情を知って妖夢はそれ以上粘ることはなく、同情の色を滲ませた視線を向けてくると、また来ますねと言って、山を下っていった。

「……………」

煎茶を飲み干して食器を洗い、刃物の研ぎを再開する。一日で研ぎ終えてしまおうと思っていたが、今の進捗では難しいか。優先したいものから手をつけるとしよう。

まずは鈍。次いで小太刀。そのあとは小刀と包丁を一本ずつ。鋸は直近で使う予定はないので後回しで構わないだろう。再び意識を砥石と刃とに収束させる。

顔を上げると、宅の外は夕照に染められていた。鋸を除けば、あとは小刀と包丁が一本ずつ残るだけだ。なんとか今日中には終わりそうだと大きく息を吐く。前に刃物を研いだのはいつだったか、間を空けたせいで随分と手間取ってしまった。

「柎、いるー?」

靴の鳴る音。聞き慣れた声の方へ顔を向けると、にとりがひよこ顔を覗かせた。

「にとりか、どうした?」

「や、はたてから今日は休みだつて聞いてさ。お酒でもどうよと思つて」

にとりは酒を入れているのだから瓢箪をちらりと見せ、笑う。

「うん、いいな。ただ、あと少して研ぎが済むから、そのあとにしてくれ」

「ん、わかった。あ、はたてもお酒持つて来るつて言つてたから」

「そうか。茶の間に妖夢が持つてきた羊羹があるから、適当に茶と合わせてくれ」

はい、と軽く手を振り顔を引つ込めた友人を見送り、なら手早く終わらせなければと包丁を手を取る。

それを研ぎ終えた頃、翼のはばたきが聞こえてきた。もう来たのだろうか。

「柎ーっ！ 羊羹ありがとーっ！ 早く終わらせてねーっ！」

壁越しに不意に叩きつけられた声に頭が揺すぶられた。小さく耳鳴りに思わず眉をひそめてしまう。きちんと礼を言うのは律儀なもので好感を抱けるが、顔も見せずに大声でというのはいかがなものだろう。彼女が衣食足りた識者なのか単なる怠け者なのか、私にはわからない。

小太刀を研ぎ終えて砥石を片付け、二人がいるだろう縁側へ向かうと、既に一升瓶が二本空いていた。どちらも深く酔った様子がないのを見るに、大半を飲んだのははたてなのだろう。にとりも決して弱くはないが、鬼に次ぐ酒豪である天狗の飲む速度と合わせればまず先に酩酊してしまふ。

「お疲れ、柎」

「やっと来た。ほら、駆け付け一杯！」

勞ってくれる河童の友人と違って、天狗はずいと酒杯を薦めてきた。

悪意がないのはわかつているし、一仕事終えた充実もあったので、拒むことなく手捻りのくい飲みを呷る。

「肴もなしに飲んでいたのでですか？」

「だって私作れないし、羊羹でいいかなって。あ、食べ切っちゃったよ。ごめんね？」

図々しいが、それでもはたてに對して特段の不快を感じないのは、少ない付き合いで彼女の人柄を知っているからだだろう。

邪気も悪意も、偏執も陰湿もない。粘りつく感情のない清風のごとき人格は、多少のことなど軽く吹きさらしてしまふのだった。

「昼に蔵から出した味噌漬の猪がありますから、それを肴にしましょうか」

「沢から採ってきたミズも蔵に入れといたから、それで何か作ろうよ。お浸しとかどう？」

「お浸しなら筍も一緒に食べたいな。椀、どう？」

「構いませんよ。作ってきますから、私の酒も残しておいてください」

話している間にも、瓶の中身は消えていく。これは蔵にある私の秘蔵酒も出さなければならぬか。苦笑しながら、材料を用意して炊事場に立つ。もちろん、使うのは研いだばかりの包丁だ。

気付けばもう日暮れ。何を為そうかと悩んでいた昨日や朝が遙か過去のようだった。何を為そうかと懊悩していても始まらない。為せば成る、そういうことなのだろう。それに気付けたことこそが、今日の余暇の真の価値なのだろうと、ミズの莖を切りながら思った。《了》

飛ぶ首と飛ばす首

お七の婆さんが私のもとを訪れるのは、いつも夕暮れ時と決まっていた。その日も婆さんは、私の住む長屋の戸をぶつきらほうに叩き、持ってきた鍋を手渡した。そして別れの挨拶代わりに「夜は化け物に気い付けるんだよ」と言い置いて帰っていった。私はその背中を少しの間見守り、そしてその遙か上空で群を成す鱗雲を見た。真つ赤な海は秋の深さを告げていた。

化け物は私だよ、と言ってしまった思いが無い訳じゃない。だがちとらしがない飛頭蛮だ。里のルールを破ってしまえば、ここに住むことすらできなくなってしまう。

鍋を竈に置いて中を検めると、思った通りに五目煮しめがぎっしり詰まっていた。そしてちょうど炊き上がった飯を掻き混ぜる。お七の婆さんがこいつを持ってくるのを見越して、あらかじめ炊いておいたのだ。

天気が良い日には、婆さんはこうして何かしらを差し入れてくれる。理由は知らない。いつからだかも忘れた。だいたいは今日のような煮しめで、あとは肉なり魚なり、とにかく米と一緒に食えるものである。生粋の妖怪である私は、こういった食事を必ずしも必要としない。必要とはしないが、せっかく貰えるものをただ捨てるのも悪い気がするし、食べ気合いが入るのも事実だ。なのでいつも有り難く受け取ることにしている。味付けは

ちよいと濃いけれど、それがまた好みに合うのであった。

棚に伏せておいた茶碗を手取る。端が数カ所鋭く欠けていて、運が悪いと唇を切つてしまふような危険な茶碗だ。買ひ直すか拾つてくるか、とにかく新しいのを手に入れようと考えてはいるのだが、ついつい忘れてしまふ。忘れないように心の帳面に殴り書きをしてから、釜から飯を盛つた。

卓袱台の中心に鍋を置き、その手前に茶碗を置く。そしてこれまた塗りの剥げかけた箸を一番手前に置く。縦一列に並んだ食器たちの完璧な配列は美しかった。得体の知れない小さな感動に対して、私は丁寧に手を合わせた。

「いただきます」

まずは煮しめをひと口、煮汁がこぼれないように茶碗でしっかりと受けながら口へ運ぶ。醤油を目分量で計ることすらせずにおち込んだのだらういつもの味。それを受け止めるべく唾液が一斉に溢れてきた。これだ。こうでなくては食事など楽しくはない。白飯を一杯かきこみ、八十八回を数えながらの咀嚼を始める。いつだったか、竹林の狼女と湖の人魚姫にこの煮しめを分けてやったことがある。奴らは煮しめを口にするなり口をひん曲げて、塩分の取り過ぎは身体に毒だと熱弁してきやがった。何も分かっていない連中である。

お七の婆さんは健康だとか栄養だとか、そういう概念を超越した先にいるのだ。妖怪の癖に細かいことを気にする連中には食わせてやらん。せいぜい節制して長生きすればよろしい。

飯の山が切り崩されたところに、今度は煮しめをぐわしと引っ掴んで乗つける。だいた飯と具が同量の煮しめ丼である。唇の端が綻ぶのを抑えきれない。茶碗の中身を端でぐるぐると掻き回し、よく混ぜたものを再びかきこむ。行儀の良い食べ方でないことは重々承知だが、別に誰が見ている訳でもない。栗鼠のように頬張って、もう一度八十八回、目を瞑って一心に数える。舌が痺れそうな醤油の味に集中するため、視覚を一時的に遮断するのだ。生きるための食事を必要としない妖怪にとって、飯を食うことはただの趣味である。だからこそいつでも全力だ。味覚を一瞬たりとも無駄にしないよう、一心不乱に愉しむのだ。

空にした茶碗に再び飯を盛り、だいたい同じ行程を満足するまで繰り返す。私は空腹を知らない。同じように満腹というものも分からない。だから心が満たされたときに食事の終わりである。気分が乗らないときは茶碗の半分も食べないし、反対に釜の飯をまるつきり平らげても足りないことだってある。今日は三度のおかわりをした。平均的な数値だ。

心が健康な証拠だ。妖怪にとっては何よりも大事なことである。

二つ目の首を浮かせ、食事をしていた首の口元の汚れを、目で見ながらしっかりと拭う。こうして自分の身を自由に見ることができるようから、私は姿見を持たない。頬から顎にかけて、念には念を入れて確認する。首は商売道具だ。何があっても汚れを残してはいけない。闇夜に浮かんだ生首が、頬に米粒を付けているところを想像してみてほしい。「幻想郷のろくろ首はほつぺたにおべんとが付いている」などと噂になった日には、飛頭蛮の商売あがったりだ。妖怪はなめられたら終わりである。

首の検分と茶碗の片付けが終わる頃には、陽はとつぷりと沈んでいた。仕事の時間である。まだ半分ほど残っている煮しめにきちんと蓋をかけてから、私は長屋を出た。「夜は化け物に気い付けるんだよ」というお七の婆さんの言葉が蘇る。私の正体を知らない婆さんがそんなことを言うのは、単に独り暮らしの娘を気遣ってのことだろう。寡黙で偏屈な婆さんだが、あれはあれで優しさなのだ。私は気を付けられる方の化け物である。だが婆さんの言葉も一理あるな、と最近はあるようになった。逆さ城のあの一件で、化け物よりも化け物みたいな人間たちに出会ってからは特にだ。「首を見る度うなされよ！」と決めた詞を放ったくせして、あの後しばらくは御幣を見る度うなされていたものだ。

軽く地を蹴り、空へと跳び上がっていつもの縄張りへと向かう。川沿いの柳の下へと軽やかに着地したときには、私の姿はもう先程までの地味な小袖の町娘ではなく、派手なマントを纏う怪人へと変わっていた。今夜も常通りの稼業が始まる。腕の見せ所、もとい首の見せ所である。

お化けにや学校も仕事も何にもない、というのは御伽話の中のことで、実際にはやらなけりやならない仕事なんざいくらでもある。妖怪とか神とかそういうものは、人間と関わりを持たなければ存在できない。そのための方法は幾つかあるが、中でも一番多いのは人間を恐怖させることだ。大抵の妖怪はそのために生きており、自らの脅威を人間に知らしめんと、あの手この手を尽くしている。私もそのひとりであるからして、こうして毎夜毎夜出かけてきては首を飛ばしている訳だ。

さっそく、闇夜の中を男が急ぎ足で駆けてきた。見るからにびくびくしており、脅かし易そうな相手である。

「ばあつ」

「ひいっ」

飛ばした生首を浮かべてみせるだけで、相手は腰を抜かして這々の体で引き返していっ

た。とりあえず安堵する。柳の下にろくろ首が出るという噂は、上手い具合に広まってくれているようだ。今の男が端っからすっかり怯えていたのもそのおかげだろう。

仕事のやり易さでいえば、怪異として名が売れ始めた今が一番良い時期だ。そして最も慎重にやらなければならない時期でもある。噂が広まれば妖怪退治屋がやってくるだろう。そいつら相手に上手く立ち回ることができれば、我が名声はさらに高まる。人々が赤蛮奇という名前だけで私を恐れるようにまでなれば、こうして毎晩出てこなくとも食い扶持が稼げる訳である。適当な退治屋がやってきて、そいつらを食い殺すのが最も良い。逆に退治されてしまうかもしれないが、こちらもある程度は戦闘の訓練を積んでいるから、そう簡単に後れを取るつもりはない。

妖怪の中には、悔い改めて人間の役に立つことを誓い、守り神のような存在に変わる者もいるという。だが、飛頭蛮の能力はただ首を飛ばすだけだ。そんな力で何をどうしたら人間に貢献できるのか。アイデアの無い私はそこにあまり期待はしていなかった。何にせよ、ここでしくじっては元も子もないのだ。

「ばあつ」

「ひいっ」

二人目の男も容易く腰を抜かして逃げていった。上手くいつているのは良いことだが、いささか退屈である。何せ首を飛ばすことなど、私にとつては赤子の手を捻るより容易いことなのだ。それを寄ってくる人間にただ繰り返し返すだけなのだから単調にもなる。

それからしばらく、人間がやってくる気配はなかった。夜も深いし当然のことだろう。しかし、誰か来るかもしれない以上は長屋に帰る訳にもいかず、私はただ茂みの中でじつと座り込んでいた。尚のこと退屈に蝕まれ、辺りの虫に石を投げたり、捕まえた幽霊を捏ね回したりしてみたが、やがてそれにすらも飽きてきた。人間はやはり寄ってこない。こういうときは妖怪稼業が恨めしくなる。脅かしたくとも相手がいなけりやどうしようもない。

幽霊を逃がしてしまった私は、いつしか深い思索に沈んでいた。もはや何度考えたか分からない、答えが出るとも知れない問い。赤蛮奇という存在の根元にも関わるような、それでもないような題目。それはとても大事で、この上なくどうでもよいテーマであった。即ち私が先程のように飯を食った、その後始末の話である。一体全体、どうして自分は便所に行く必要があるのだろうか。

飯を食べば、出るものが出る。古来よりあらゆる生き物に不変の理である。それは飛頭

蛮たる私にとつても例外ではなかった。お七の婆さんの飯を食った後、しばらく経てば出るものが出る。それが人間ならば、あるいは飛頭蛮でない他の妖怪ならば、当然のこと過ぎて省みなどしないだろう。だが私には、飛頭蛮には首が無い。頭と胴が最初から生き別れている。なのはどうして、口から入れたものが尻から出てくるのだ？

これは私が物心付いた頃から常々考え続けてきた問題であつた。口で食つたものが自分でも知らぬ内に胴へと転移している訳だ。自分の身体を開けて見たことなどないから分からないけれど、この腹の中には胃を初めとした消化のための内腑がきつと揃っているのだらう。だが食道だけはない。頭の方も胴の方も、断面は平たい皮膚で馴らされていて、咀嚼したものを通す口など開いていないのだ。我ながら奇妙な話ではないか。その力の正体を、何とかして確かめてみたい。

はつと我に返る。人間の足音がした。慌てて首を飛ばす。

「ばあつ」

「ひいつ」

三人目の男もまた、容易く腰を抜かして逃げていった。それを見送り、私は再び思索へと戻る。

なにぶんずうっと不思議に思っていることだったから、何度か実験をしてみたことがある。まずは距離だ。首をできるだけ遠くに飛ばして、そこで食ったものが腹に移るかを試してみたのだ。だいたい迷いの竹林辺りが首の届く限界だったので、そこに住む狼女に頼んで手伝ってもらった。彼女は随分と怪訝な顔をしたが、断ることはしなかった。お手製の兎肉の薫製は良い味で、実験は成功、つまり里に置いたままの私の腹はきちんと膨れた。首は竹林にあるのに、である。自分の身体ながら少し気味が悪かった。

次は数である。私は幾つもの首を持っており、そのどの口でも食事ができる。それでは複数の首で一斉に飯を食ったらどうなるのか。これには狼女に加え、湖の人魚姫にも手伝ってもらった。人魚姫も鳩が豆鉄砲を食った様な顔をしたが、協力を引き受けてくれた。人の良い妖怪ばかりで結構なことである。さて早速三つの首で食事をしてみたところ、果たして三倍の速度で腹が膨れた。

これらを総合して考えれば、私の首は距離と数に関わらず、食ったものを胴体に送ることができるといことになる。便利とも不便とも判別できないが、これでますます分からなくなつた。一体どうやって首と胴は繋がっているのだろうか？

「おい、誰かそこにいるのか？」

「あつやべ。ばあつ」

「ひいつ」

四人目の男も腰を抜かして逃げていった。危なかった。物思いに耽り過ぎてつい見過ぎすところだった。時刻はいつの間にか、草木も眠る丑三つ時である。そんな時分になん所を通るだなんて、まったくどうしようもない奴だ。とても噂に疎いか、余程勘が鈍いかのどちらかであろう。待ち構えてなきゃならない方の身にもなってみろ。こっちは考え事しているんだ。もうちょつとまじな時間に通るかかれ。

ひとしきり怒ってはみたものの、またもすぐに手持ち無沙汰となってしまった。細い月が鋭く輝いている。日が昇るまではまだ間がある。帰りたいのは山々だけれど、妖怪の間はまだまだ続く。恐怖を存分に振り撒くにはここで手を抜いてはいけない。私は仕事には真面目なのだ。

さて、首と胴の繋がりについて考えるとき、避けては通れないのが酒の話である。他の妖怪の例に漏れず、私も酒に目が無い。そして酒を飲めば酔うということも自明の理であろう。口から入った酒は腹で吸収され、頭へと酔いが回る。この一連の流れにも、我が首と我が胴はきちんと做ってみせるのだ。そして悪酔いすれば吐くものはちゃんと吐く。つ

まりは頭から胴だけではなく、胴から頭に向けてもものは送られている訳だ。さらにそれだけではなく、ひとつの頭で水を飲み、別の頭で嘔吐するという芸当まで可能であった。これは大変便利である。首の使い分けさえ間違えなければ、わざわざ廁まで走る必要が無い。人間を驚かすときの次にこの能力が活きる場面だ。

つまりは循環が成り立っているという訳である。酒精が回るということは血もきちんとして巡っているはずだ。原理こそ分らないままだが、分かたれた首と胴の間を行き来する見えない何かがあるのだ。人里と竹林ほどに距離が離れていようとも、首が複数あろうとも、自由自在に通じ抜けられる秘訣。それが我が能力には隠されている。

心の中に稲妻が走った。天啓を得た私は思わず立ち上がった。これは思わぬ着眼点ではないか。つまりは、もしも退治されてしまったとき、その次善の策である。いつだったか読んだ外来の小説に、地球と宇宙の果てを繋ぐ何たらという穴が登場したのを思い出したのだ。自分の首は、そういう力を持つのではなからうか。修行を積んで、首と胴の距離がいくら離れても問題なく物を転移させることができるようになれば、それは人間の役に立つだろう。いや役に立つどころか、これは革命である。遙か遠くまですぐさま物を送ることのできる能力なのだ。どんな神だって持ち合わせていない、唯一無二と言っていい力だ。

これを人間に分け与えれば、こんなちまちまと恐怖を振り撒いているのが馬鹿らしくなるくらい、莫大な人気と信仰を得ることができよう。妖怪稼業なんぞ廃業し、物質転移の神として世界に君臨するのだ。巨大で豪華な神殿に住み、数え切れぬ程の供物を捧げられ、無数の首を世界各地へと意のままに飛ばすのだ。

「おい、あんたそこで何してるんだ」

「何だ貴様は。頭が高いぞ。私は唯一神なのだからな」

誰だ、世界を統べる予定の私に気軽に声をかける愚か者は。神となった暁にはまず貴様から罰してやるぞ。逃げてでも無駄だ。その顔はちゃんと覚えたからな。

夢はどんどん広がっていく。首と胴だけでなく、首同士の間でも物質を転移できるとしたらどうだ。億を超える首を世界中に配置し、その間で自由自在に物を移動させられるとしたら。いや物質だけじゃない、人間の往来すら可能にできるとしたら。これは素晴らしきことだ。地球の裏まで一瞬で往復でき、何なら月にだって瞬きの間に到着だ。行きたいときに行きたい場所へ、ただ望むだけで誰でも行ける。既存の運輸網は瞬く間に過去のものとなり、旅の形も大きく変わるだろう。ここまでくれば、人間社会は私を抜きにしては成り立たなくなる。誰一人想像しなかった形で、どんな神も完成させることができなかつ

た世界的信仰体系を確立できる。つまり、この世の誰よりも強大になれる！ 夢も欲望も我儘も、全て叶え放題。考えられない出世だ。そうなたらどうしようか。どんな願いを叶えようか。

「……はっ」

ふと川の水面に移る自分の姿に気付いた。その反射が見えるくらい、辺りは既に明るくなっていった。慌てて空を見ると、柳の向こうの空はとつくに白んでいた。夜が明ける。妖怪の時間が終わる。

現実に戻り、今日の成果を思い返す。まあまあ頑張ったのではなからうか。最近は何だか義務のようにここに立っているから、人間を待っている間の退屈がどんどん酷いものになっていくけれど。とにかく今は辛抱のときである。地道に人間に恐怖を与え、怖れられることこそ肝心だ。たとえ私の将来がどんなものであろうとも、その事実に変わりはない。

地面を軽く蹴り、ひとつ跳びで長屋へと帰る。妖怪から町娘へと戻る。地味な小袖に目を落とし、少しだけ溜息を吐いた。いつかは自分も、大妖怪のような綺麗で派手な服を着たいものだ。

濡れ布巾で身体を拭ってさっぱりしてから、煎餅布団に潜り込んだ。妖怪は眠る必要はないが、昼に首を飛ばしても何だか阿呆みたいな絵にしかならないので、それだったら寝ている方が幾らかましなのであった。さっきの将来の夢を、まずは夢の世界で堪能しよう。修行やら何やら、面倒なことはその後で良い。

そして目が覚めたら、お七の婆さんから貰った煮しめの残りをまた白飯とともに平らげるのだ。やってくるだろう婆さんに鍋を洗って返さなければならぬ。次は何が差し入れられるだろうか。そうだ、兎肉がいい。竹林で狼女から貰ったような、ぷりぷりした分厚いやつ。何だかあれが無性に食べたくなった。ああでも、それにはまずお天道様に頑張ってもらわなきゃな。天気が悪いと、婆さんは外を出歩けないから。そうだ、唯一神になった暁には、婆さんの周りから雨も風も取っ払ってやろう。

にへらと笑いながら眠りへと落ちていった先でその日見た夢は、兎に襲われて全ての首を醬油で煮しめられた拳句、巨大な御幣に蜻蛉りにされるといふ、それはそれは酷いものだった。《了》

L
a
F
l
a
m
m
e
d
'
O
r

「うーんと、あとはあれと、あれと……」

普段なら夕食の準備をしながら済ませてしまふ明日の朝食準備だが、今日はすっかり遅くなってしまった。壁の時計が2時を指すのを見て、ふう、と私はため息をつく。あともう少し、そう思つて冷蔵庫の方へ向かつた瞬間。

「咲夜？」

可愛らしい声に名を呼ばれた。この声の主は、

「あら、妹様。起きてらしたのですか？」

我が主人の妹君ーフランドール・スカーレット様。普段は真つ先に床につく彼女がここにいといるということは……

「目が覚めてしまったの。ねえ、お腹がすいてしまったんだけど」

私と“彼女”の予想通りの言葉に、笑いだしそうになるのを必死で抑えた。

「まあ……夜中の摘み食いはお身体にあまりよろしくありませんわ。お嬢様に叱られますわよ。……でも、今日はそれも仕方ありませんわね。軽く何かお作りしましょう。」

私のその言葉を聞くやいなや、フラン様の顔は綻び、それに連動するかのようにおなかぐくう、と鳴いた。

炊いてあつた米をお椀に盛り、冷蔵庫から卵を取り出す。ご飯の中央を窪ませて卵を割り入れたら、葱を細かく刻んで乗せる。仕上げに胡麻油と醤油、炒り胡麻をふりかけたら。「お待たせいたしました。」

おそろく、フラン様が見たことのないであろう食べ物を出した。輝く卵黄と香ばしい醤油の香りに、フラン様はかわいらしいおめめを見開き、わあ、とつぶやいた。

「ねえ、なあにこれ？」

「夜中に摘み食いを企む悪いフラン様へのお仕置きです。庶民の食べ物ですわ」
多分。

「へえ」

フラン様はお気に入りの中の真っ赤な箸を握り、わくわくと翅をばたつかせた。どうぞ、と私が勧めるやいなや「いただきます！」と一口、放り込んだ。

それは今まで口にしたことのない風味だった。

眼がきらんと輝いた。それはフラン様が食べ物に気に入った時の合図であり、メイド冥利に尽きる一瞬でもあったのだ。

「お気に召しましたか？」

「うん、とても美味しい！　こんなの食べたことない！」

「うふ、それは良かった」

こっそり作っていた自分の分も食卓に出し、フラン様の目の前に座る。実は私もお腹がすいていたのだ。他人にご飯を作るのは自身の食欲も唆る。加えて醤油の香りを嗅いだら我慢できるのも時間の問題だった。

「私も少しいただきますわ」

「庶民の食べ物なのに？　お姉様に叱られるわよ」

「その時はフラン様も同罪ですわ」

いただきます、と手を合わせ一口。

それは今まで口にしたことのない風味だった。とろける卵がふっくら炊けた米を包み込み、醤油のしょっぱさと胡麻油の香りが口から鼻へ。とろみと葱のさっぱり加減が良い具合に引き立て合い、いくらでも食べられそうだ。これは噂に違わぬ旨さではないか。驚き

ながらもこの料理を教えてくださいました彼女―博麗霊夢に心で感謝した。

「ごちそうさまでした、いつの間にか完食していたフラン様は、お茶を一口飲みながら言った。

「とても美味しかったわ。ねえ、これはなんて食べ物？どこで知ったの？」

「これは『卵かけご飯』というのですわ。昨日霊夢が教えてくれたのです」

昨夜。いつも通り、博麗神社での宴会に呼ばれた私たち紅魔館一行は遅くまで酒盛りを楽しんでいた。夕食も兼ねていた宴会だったのだが、フラン様は肉や野菜を少し摘むとすぐに眠気に負け美鈴の膝を借りて寝てしまっていたのだ。

「こんな変な時間に昼寝して。どうせ夜中に起きてくるわよ、こいつ。お腹空いたーとか言つて。あつそうだ、そういえば夜食にぴったりな簡単な料理があるんだけど……。」

「……と、言っていましたわ」

「へえー、霊夢って意外と優しいのね」

「どうも彼女自身今このご飯にはまっているようで…嬉嬉として教えてくれました。大葉を刻んでも美味しいとか、擦った胡麻も香りが良いとか。山椒も合うそうで」

その場面を想像したのか、フラン様はんふふ、とにやけた。確かに手軽さの割に合わないうま味には是非他人に教えないと損をするような不思議な力がこもっていた。霊夢のその気持ちは大いにわかる。それはお嬢様にも、同僚にも食べさせたことのない未知の食べ物だった。

「ねえ咲夜。今度お姉さまたちにも食べさせてあげたいわ。」

私と同じことを考えていたのか、フラン様がそう告げる。

「そうですね、喜んで召し上がるかと」

珍しいものの好きなお嬢様はきつと喜ぶに違いない。

窓から夜風が爽やかに吹き込んでフラン様の虹色の翅を揺らし、当の彼女はすっかりうつらうつらしていた。私はその体をそつと抱き抱え、お部屋に運ぶ。ベッドに寝かせて布団をかけ、そつと部屋を出ていった。

「おやすみなさいませ。」

夜はまだ長い。私も早く仕事を終わらせて寝よう。

月を見て、うーんとひとつ伸びをした。《了》

秋雨

屋敷を出た頃、里の上空には雲一つなく、暖かな日差しが広がっている。本来なら使いを頼むのだけれど、そういうわけにはいかない事情もあったので外へ出た。東の方には暗い色をした雲が見えていたが、まだ秋雨は降らないだろう。

馴染みの茶屋に顔を出し、新しい紅茶の茶葉を選んでいたら、屋根に何かが落ちてくる音が聞こえた。慌てて、暖簾から首を出してみると、前髪が少し濡れた。店主も暖簾の隙間から顔を覗かせ、二人、目を合わせた。暖簾の向こうに手を伸ばせば、冷たい雨粒が掌を濡らす。

「傘、お貸ししましょうか？」

「それは流石に……」

「でしたら、上で飲みますか？」

「お願いします……」

「急な雨ですし仕方ありませんよ。どれにします？」

「これをお願いします」

ここの茶屋は二階で紅茶と洋菓子を食べられるようになっていたが、里でそれ相応の身分にいる私は利用したことがなかった。しかし、ここで傘を借りるかどうかと考えると、

二階の席を借りる方が良いように思えた。里の者に、こういうことで借りを作りたいなくなつたし、下女に何を言われるか考えたくない。

階段を上る途中で、駆け上がる店員とすれ違った。二階の窓は開け放たれたままだった。窓際に座っていた女の肩幅の色が微かに変わっていた。女は店員と一言二言話すと、同席者との会話に戻る。

二階は一階のように茶葉やカップやソーサーは置いておらず、何人かが紅茶や洋菓子を楽しめるようになっていた。二階に姿を見せると、それまで賑々しかった二階の視線が私に集中したかと思えば、一瞬沈黙が生まれ、すぐに元の活気を取り戻した。

彼女等の邪魔をしないように、目立たない箸の席で紅茶が運ばれてくるのを椅子に腰掛け、待つ。足が床につかず、遊ばせると心が落ち着きをなくし、少しずつ楽しくなりはじめた。屋敷も小鈴の所も、人里にあるほとんどの住居はどれも平屋であり、二階に上がる経験はほとんどない。こうして、二階から往來を見下ろすことは今日が初めてだからだ。人々は一様に、傘をささずに雨降る中を駆ける。その中には見知った顔が幾つかあった。ずっと向こうに見える橋の楓は少し色付いているようだった。

店員に声をかけられ、視線を戻す。熱い紅茶と母のショートケーキがテーブルに置かれ

る。小さなフォークでケーキを切りながら、このまま雨が止まなければどうしようか。店員の更なる厚意に甘え、傘も借りて帰ることになるのだろうか。それとも、雨が止むまでここで紅茶を嗜むつもりなのだろうか。下女が気を利かせて、傘の一本でも届けに来てくれればいいのだが、出掛ける時に店名までも告げていないため難しいことなのかもしれない。

となるとやはり、ここで雨が止むまで待つしかないのだろうか。この時期の雨は、夏のようにすぐに止まない。細雨になった頃を見計らって、走って帰った方が良さだろうか。あるいは本降りになる前に走った方が良さだろうか。しかし、この熱い紅茶を一気に飲み干すことはできない。店員の厚意を受けてしまったため、無碍に扱うことはできないし、たくない。ならば、更に厚意に甘えればいいではないかと考えてしまうのだが、そういうふうには甘えるのが私は得意ではない。

普段ならば、こういう身の回りの買い物は下女に頼んでいる。それが彼女の仕事だ。店員の一連の行動は仕事ではない部分があるように思える。もし全てが仕事の一環であれば、傘を借りるのも簡単だった。

こうして外に出たのは茶葉自体が切れたのもあるが、それよりも仕事の息抜きの方が大

きかった。「幻想郷縁起」の編纂がどうも上手くいかない。いつまでも屋敷に籠もり、編纂を続けるのはしんどい。足はしびれ、腰が痛くなり、手も凝る。幸いなことに「幻想郷縁起」の編纂に期日はない。私が死ぬまで続けられる。ならば、少しの間、息抜きをしても良いだろう。

八雲紫や四季映姫・ヤマザナドゥに何をしているのかと訊かれても、編纂のための取材ですと答えればいい。

テーブルの端に水滴が落ちた。視線を上げると同時に「相席、いいかしら？」と声をかけられた。そこには妹紅さんの姿があった。雨の中を走ってきたのか、息が乱れ、髪にも服にも水が滴っていた。

「良かったら、どうぞ」

袂から手拭いを取り出し、妹紅さんに手渡しす。妹紅さんは一言、礼を述べ、身形を整える。

「急に降られちゃったね、今日は晴れる予定だったのよ。龍神の目だって白だったし」

「秋空は変わりやすいですから」

「困ったものね」

「全くです」

「阿求も?」

「そんなところですよ」

妹紅さんという話し相手を得た途端、それまで悩んでいたことが吹き飛んだようだった。思い過ごしでなければ、妹紅さんに何かと気にかけてくれている。何か悩んでいる時に、妹紅さんはよく会いに来てくれる。そうして、何でもないような素振りでも何かを話してくれる。今回もそうなのだろう。

私がこんな所で紅茶を飲んでいること自体珍しく、妹紅さんがこんな所に来店するのも珍しい。妹紅さんからとってしてみれば、ただ雨止みを待っているだけなのだろうが、わざわざ人里の中心部にあるこの店を選ぶ必要はない。そんなことを改めて訊くこともなければ、妹紅さんの方から話すことはなさそうだ。そういう、何故を掘り下げるのは私達の性に合わなかった。理由はどうであれ、私達が同じ所で、同じ時を共有している。今もただ、私達は雨が止むまでの間、一緒に居るだけなのである。雨が止めば、私も妹紅さんも各々の役目に戻るだろう。私は屋敷に戻り「幻想郷縁起」の編纂を、妹紅さんは人里の警備か手伝いを。

しかし、今は、雨が上がっても妹紅さんと一緒に居たい。編纂のことの相談ではなく、全然関係のないことで離れたくない。稗田阿求という人里で知らない者はいない。どこにいても、一瞬、沈黙や好奇に晒される。そういう所に生まれてしまったため仕方のないことだと割り切ろうとしても、実際にそういう場を体験してしまうと心苦しい。

身の回りのことを下女に任せてしまうのは、そういう理由も存在していた。が、全ての下女に任せる生活を続けてしまえば、一日中、編纂のために屋敷にいるだけだ。編纂が上手くいかなくなつた時、屋敷の空気が変わる。そうなる前に、外に出ることも必要であつた。私の日常は、「幻想郷縁起」の編纂のためでしかないわけではないだろう。

雨は依然として降り続けているようで、窓ガラスを叩き続ける。雨音とは違う、軽い音が耳をついた。妹紅さんがアイステイーにシロップを入れて、かき混ぜているところだつた。細いグラスに、曇つた顔が見える。妹紅さんは私の顔を見て、微笑を浮かべた。

「編纂、かしら？」

ぬるくなつた紅茶に口をつけ、考えてみたがどうも答えがはつきりしない。

「自分でもよく分かりません」

「何かあつた？」

「何もないから大変なんだと思います」

「何かあつてほしい？」

「……それはそれで大変ですので、何もあつてほしくないです」

「我が儘な悩みね」

「いけませんか？」

「良いと思うわ」

「妹紅さんはそんなことはありませんか？」

「私？」

訊き返されたのが意外だったのか、妹紅さんは上ずったような声を上げた。妹紅さんにかようなことを訊くのは酷いことだろう。妹紅さんは老いることも死ぬこともない。私が思っているよりもずっと沢山のことを経験している。私の悩みなど、ずっと前に体験していることに違いない。今もそういう悩みを持っているかもしれないが、それを面に出さないのは、長年生き続けた知恵の成果なのかもしれない。

「沢山、あつたわよ。でもね、嬉しいこともあつたのよ。阿求もあるでしょう？」

「ええ、まあ、少しは……」

「でしょ？ それにね、こんなことを教えてくれた人だっているのよ。『そんなに気分が沈むのは雨だからさ』ってことよ。だから、阿求もそうなのよ」

そう言われると、そんな気がする。確かに晴れている時にこんなことを考えないし、考えたところですぐに切り替えられる。妹紅さんが言っていたように、嬉しいことやこれからの楽しみを考えてしまう。しかし、妹紅さんにそんなことを言えるとは余程の者なのだろう。

「誰がそんなことを？」

「あなたよ」

「私はそんなこと言ってませんよ」

「言っていたのよ、八代目の時に。あなたは覚えていないかもしれないでしょうけど。私は覚えているのよ」

妹紅さんは頬を綻ばせ、アイステイーを飲む。その顔を見ると、不意に妹紅さんの嬉しいことの中には私もいるのではないかと思った。

出会い、別れ、また出会い、別れる。その繰り返し。それが妹紅さんと私達御阿礼の子の常。けれども、その出会いと別れの中で生じるものは同じではない。どこか重なり、ど

こか違う。私達が悩み、妹紅さんが悩み、私達が笑い、妹紅さんが笑う。私達が妹紅さんを助け、妹紅さんが私達を助ける。どちらか一方が支えられるのではなく、振り子のよう
に支え合う。そういう三十年を、妹紅さんは密かに楽しみにして居るのではないだろうか。

そう考えると堪らず可笑しくなって、頬を綻ばせた。でも、そんなことを考えるとある一つの疑問に辿り着き、固い声を上げた。

「妹紅さんは私とまた出会えて、良かったですか？」

「良かったわ。また、楽しくなるわ」

「三十年しかありませんよ？」

「それだけあれば十分よ」

「どうしてそう言えるんですか？」

「私には、あなた達にはない時間がある。先代も先々代も知っている。あなたのいない百年を知っている。だから、大丈夫よ。信じられない？」

妹紅さんにそう言われると否定できなくなる。

「……ずるいです」

「あなた達が悲観的だからね」

「妹紅さんもそう思うことだってありますよね？」

「その時は頼りにしてるわ」

続けて問おうとしたのを遮るように、妹紅さんは窓の方へ目を遣った。

「止んだわね」

地面にできた水溜りに雨粒は降ってこない。通りを歩く人間は傘を閉じている。

「そろそろ行きましようか」

妹紅さんは重い腰を上げた私の手を取り、そのまま一階へと降りる。声をかけても、妹紅さんは聞こえないふりをする。諦めて、導かれるまま導かれた。店を出た時、妹紅さんの手には一本の傘があった。私の屋敷にある傘だった。

「その傘、私のですよね？」

「屋敷に行った時、頼まれたのよ」

妹紅さんの返答に頬が膨らむ。持ってきてくれたのなら、上で会った時にそう言ってくれば良かったではないか。そうすれば、嫌なことを考えずに済んだ。妹紅さんに言いたいことが一つ、また一つとわいてくる。しかし、誰かに聞かれるのは好ましくない。妹紅さんが屋敷に用があると云ったのだから、その時に言おう。

「今ちよつと怒つてますからね」

「うん、よく知つてるわ」

「私に用事があるようで好都合です」

「もうなくなつたつて言つたらどうする?」

「知りません、そんな事情」

妹紅さんが逃げないように強く手を握り、真つ直ぐ屋敷へ帰る。引つ張られる形となつた妹紅さんは困つたように笑つた。そんな妹紅さんが面白くなつてこつちまで可笑しくなつてきた。

「お説教は短くお願いね」

「いいじゃないですか、長くても。もつと長いのは聞かなくていいんですから」

「だから短い方が良いのよ……。ね、何とかならない?」

「なりません」

「あなた達つてどうしてそういうところで頑固なのかしらね……」

「私は私ですから、そんな昔のこと知りません」

「ごめんなさいね、昔話が多くて」

「悪い癖ですよ」

「仕方ないじゃない、おばあちゃんなんだから」

「じゃ、沢山、昔話してください。私、そんな昔のこと知りませんから」

「仕方ないわね、長いわよ？　なんたって、千年あるんだから」

「構いませんよ、全部覚えられますから」

「話すこと、選んでいい？」

「駄目です」

妹紅さんとそんな話をしながら秋晴れの中を歩き続けた。《了》

後書き

この度は『東方随筆合同「移り香」』をお買い上げいただき、誠にありがとうございます。この合同は本来でしたら主催する予定のなかった合同誌なのですが、読みたくもあり書きたくもあつたので主催しました。ただ、そういう急な計画は所々に穴が生じてしまうものであり、今後このような形で合同誌を主催するのはやめておこうと思うことがあります。それでも、こうして一冊の本として読者の手に渡ったことは、寄稿された皆様のお陰です。この場を借りて、お礼申し上げます。表紙絵を描いてくださったサバ缶氏にも厚くお礼申し上げます。

この合同誌は、幻想郷の少女達の生活や日常を中心としておりますので、意図的に誰が何を書いたのかは目次では分からないようになっております。執筆者を左記の通りです。

飲酒のすゝめ（藍もどき氏）

蠹魚閑話（地理公氏）

手記（淤泥氏）

探し物（ガルゾ氏）

春、三月（ひととせ氏）

青（ガルゾ氏）

食堂九千尺（嘉島安次郎氏）

昼下がりに（ハム氏）

朝の街角にて（七月耕野氏）

彼女の事（月彼岸氏）

朝夕三昧（百円玉氏）

視線（ガルゾ氏）

余暇の価値（金之助氏）

飛ぶ首と飛ばす首（しじまうるめ氏）

L a F l a m m e d · O r（ほんきち氏）

秋雨（近藤貴弥）

発行 2016年10月9日 初版

原作 東方 Project（上海アリス幻楽団）

印刷 ちよ古っ都印刷製本工房

発行者 近藤貴弥（出藍文庫）

連絡先：stkk7.920521@gmail.com

表紙絵 サバ缶（ソニサミバーノ）

執筆者

藍もどき（東方天翔記 CPU ダービー処）

地理公

淤泥（淡島臈茶店）

ガルゾ（よろづの葉）

ひととせ（四季堂本舗）

嘉島安次郎（幻想郷交通公社）

ハム（のほほん研究所）

七月耕野（Bar1884）

月彼岸（スターライト・ジャンクション）

百円玉（カリニヒタ）

金之助（濁江の蛙）

しじま うるめ（room-butterfly）

ぼんきち（真夏の雪だぬき工房）

本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。
